

63

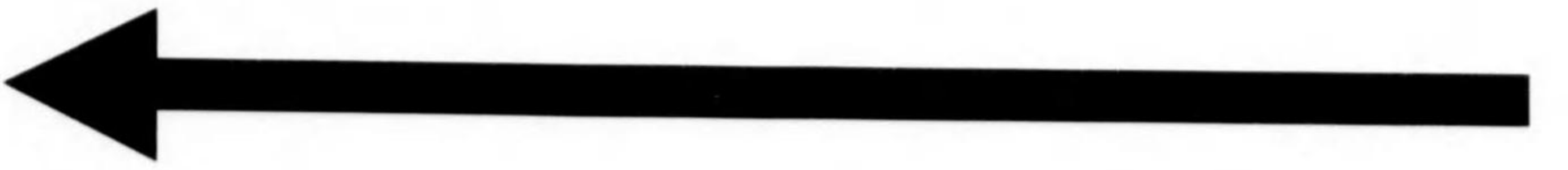
239

63-239



1200501277478

始



2-3510

63-239

~~187.7  
0.30  
1.30  
(1)~~



池田叢書第五編

春 夢 草

附 夢 の 名 殘

池田史談會發行



みけ行人寄贈本

序

竹の園生の末葉ながら世の塵垢を避けて野服葛巾、角に箔おける牛に騎りて心の趣く處に遊び、うつせみの世を觀じたるその夢の庵には、四時の花を栽ふ酒を好み香を愛し、春さかね花の心の深きをめで、觴咏に樂みし高風清操、げにたくひなき隱逸なりけらし。此翁去りて百八十年、その人を慕ひその址に住める夢遊居なにがしの孫海棠俳諧に遊び、家富みながら妻子なく、頭は剃るもなか／＼むやくしこそそのまゝにて風雅の交ひろき市隱なりけるが、京難波江戸の名だゝる好士の三愛はもとより黒牡丹の句まで集めものして、夢の名殘六巻を撰びたる、その志の殊勝さ感ずるに餘あり、さるにこの書久しく世に埋れて知られざりしを、このたびゆくりなく見いで、彼の翁の句集なる春夢草と合刻して、池田叢書の一編となりしは、誠にこよなき宿世の契とこそいふべかりけれ。

大正十五年九月

藤井紫影

### 例言

- 一、池田叢書の第五編として本書は夢菴の春夢草と夢菴の歿後百八十年にして其庵の夢に因みて編まれたる海棠の夢の名残とを併せ收めたり。
  - 一、春夢草といへば普通には夢菴の歌集にして、後又續群書類従にも收められたる刊本春夢草三卷を想像せらるれど、此にいふ春夢草は同名にはあれど、夢翁の歌集にはあらずして發句集なり。
- 唯本書據る所の二種の寫本何れも春夢草と題したれば、今其儘に名稱を踏襲して別に異論を唱へざるのみ。

一、春夢草の印行に際して東京の勝峯晋風氏は其藏書中の古寫本を、神戸の諸井國吉氏は手稿本と傳ふる秘藏本を、池田の大谷伊兵衛氏は珍藏の寛

文六年版刻の連歌大發句帳を、それぞれ貸與せられたれば、編者は先づ連歌大發句帳より夢翁の句のみを鈔寫してそれを底本とし、更に参照するに勝峯氏本、諸井氏本を以てし、互に異同を校合して本句の傍五號活字を以て其由を書き加へたり。これ全く三氏厚意の賜なり。

一、夢の名殘に至りては希觀の俳書、幸にも勝峯晋風氏の全寫本を所藏せらるるあり、これ亦氏に懇請して其厚意によりて傳寫するを得たれど、筆寫の間、尙魯魚の誤なきを保し難く、且原本と照合するの機會を得ざりしが爲め印刻に際しても不安不満の箇所頗る多し、さればこて原書に據つて完全を期し得るは何時の日なるか知るべからず、十年河清の日を俟つよりも、先づ之れを世に問ひて完きを他日に求めんとするなり。大方

の士、編者衷心微意の存する所を諒察して高教を吝まるるなくんば幸甚なり。

一、夢庵の傳記に至りては本朝遯史、扶桑隱逸傳以下古來其書に乏しからず近く我が池田より出てたる池田人物誌の如きも其一なれど、夢の名殘の編者たる海棠の事蹟に關しては前人の記録殆ど識す所なし。隨つて寡聞の編者も亦知る所なし。今は纔に夢の名殘第六卷夢菴の卷によりて知り得たる海棠が攝津麻田第二代藩主にして、後端山と號したる青木重兼の孫なりしこと、及び吳服の里に住みて俳諧の棟梁たりしことの二三從來全く世に知られざりし新事實を摘記するに止めんのみ。

一、夢菴歿後四百年に際會して予菲陋自ら揣らず、同志の後援により夢翁の

句集たる春夢草と翁に因縁深き夢の名残を合刻して記念の出版となしこれを夢翁の靈前に捧ぐるを得るは予の甚だ光榮とする所なり。惟ふ何等の奇縁ぞや、惟ふ何等の幸福ぞや

一、本書出版に當り京都帝國大學教授文學博士藤井紫影先生よりは再び序文を賜はり、勝峯晋風、諸井國吉、大谷伊兵衛の三氏は其秘藏の珍籍を快く貸與せられ、其他、林田安平、三好風人、及び稻束猛三氏の援助を得し所少からず、此に識して謹んで謝意を表す。

岸上善五郎識す

春

夢

草

諸井國吉氏所藏

春草

春

春草如茵  
一日一春  
萬物皆生  
此世之奇

花心小神花  
心之妙也  
神氣  
花心之妙也  
神氣  
花心之妙也  
神氣

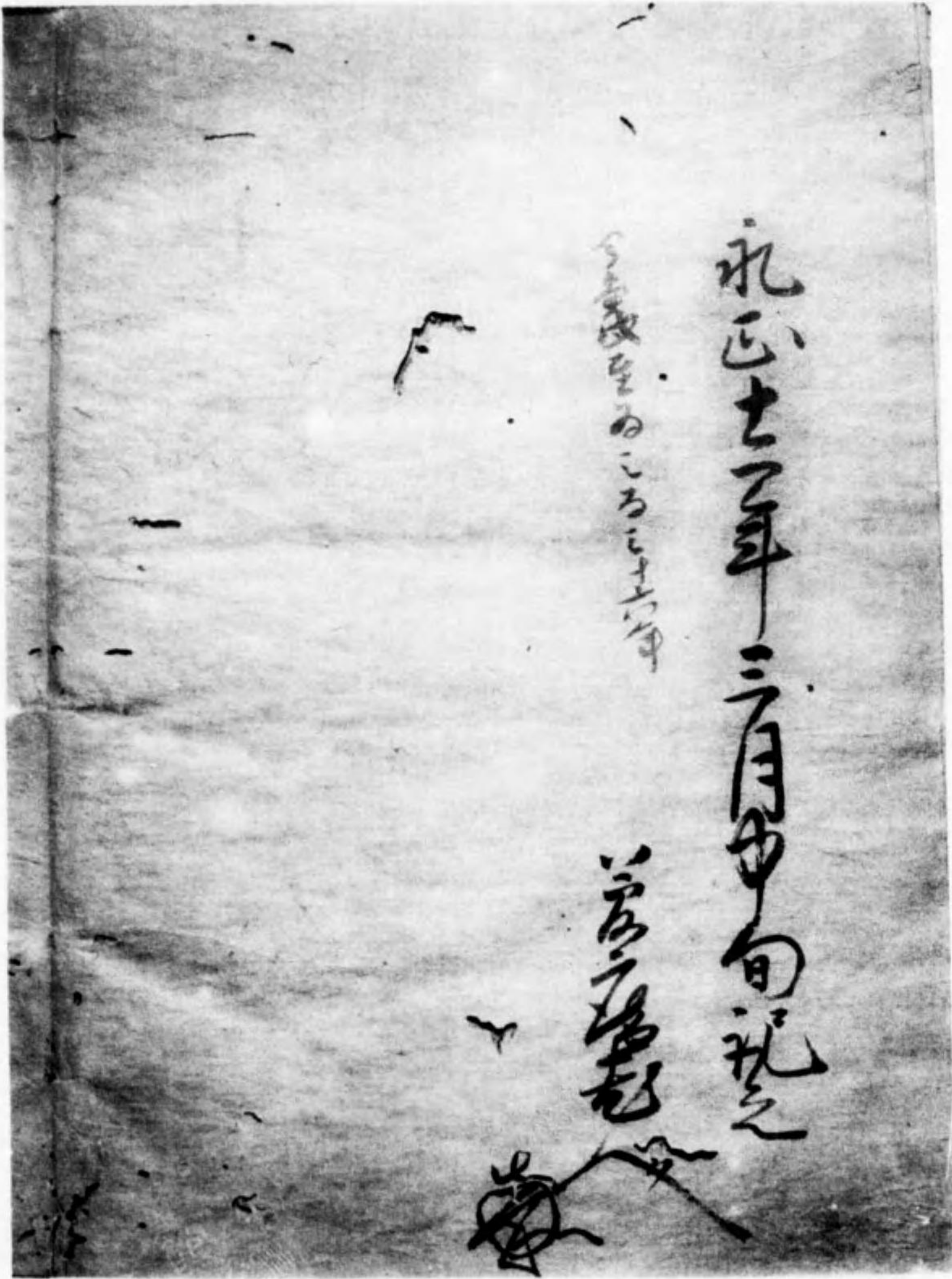
草春夢奧書

諸井國吉氏所藏



草春夢與書

齋共園吉丑泖蘇



春夢草寫本

勝峯晉風氏所藏

春夢草寫本  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首

蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首  
蘇軾詩一首

春夢草寫本

蘇軾詩一首



春夢草寫本表紙

勝峯音風氏所藏



批花 寶額 長壽 時

香夢草寫本去琳

細峯晉風丑預齋

海棠短册

稻束 猛氏所藏

結り  
かしら  
ふら  
の  
は

新業 録冊  
録束 録冊 録

春  
夢  
草



春 夢 草

春

立春

空の色にかすみもしるやけふの春

花もやはにほはしそむる春のいろ

諸井本此句なし

みちけらし空は一日に四方の春

けふさなつちきりや世々の春霞

分こしや雪の雲井路今朝の春

諸井本には此句『一日に雪ふかかりしかは』の前文あり

獨吟の連歌し侍るに

道しあれや雪に春たつ太山かな

諸井本は前文『獨吟の連歌に侍りしに』となれり

色にたてこゝろははやは老のはる

老もけふわかゆてふ年をしるへかな

梅

うめか香におれてかすめる嵐哉

梅かりに淡雪そゝくやまちな

かけや雪うめさく山の朝あらし

まてしはし梅さきのほる峰の雪

のこせはる世はうめかゝにみねの雪

かさせけふちこせのはつに宿の梅

眞存法師すゝめ侍し會に

うくひすも梅かゝおしむ羽風かな

にほへうめいさよふもたかほるの風

世ににほへおもふにふらはうめの花

藤原正盛亭の會に

花よいかに袖は梅かゝちしほかな

朝かすみ梅かゝあまるまそてかな

ゆるし色にさくともおらし宿の梅

ここの葉のかそいろやこの梅の花

攝州古曾部天満宮千句に

忘れしな神のむかしをうめのはな

勝峯本、古曾部になれど古曾部の誤寫なるべし。諸井本「天満宮千句連歌に」となる

同國榮根寺にて

袖こいは、苔にもにはほへうめのはな

諸井本の前文『攝州榮根寺の會に』となれり

尼崎和漢聯句に

梅か香に入江かすめる小舟かな

諸井本の前文は『攝州尼崎にて和漢の會に』となれり

源頼豐住吉法樂千句連歌に霞

四方の海の春もうかふや朝かすみ

勝峯本の前文『源頼豐住吉法樂千句に』諸井本は『住吉法樂源頼豐千句連歌に霞を』となり

あさみこりたちまさるなにか春霞

霞 藤原元親亭會に

あけほのをそめてちしほの霞かな

諸井本、元親亭の下にのの一字あり

あけほのを霞にゆるす嵐かな

きなれぬこ見へぬころもや春霞

かきりなきふてや千里のはる霞

丹後にくたりし時

はしたてやこたへをわたすかすみかな

濱名橋のほこりにて

はしこをくはまなに霞む夕かな

宇治にまかりし時

眞紫つむふれは霞をなかれかな

勝峯本『宇治にまかりしに』となれり

残雪

雪やはるあまさる空の淺みこり

春かけてふるやかかつらきみれの雪  
空にきえしあわ雪こほる山路哉

鶯

いひかはせ花のうくひす四方の春

勝峯本花鶯のどなれり

宗碩法師と兩人せし會に

あひにあひぬこふは鶯はなの宿

柳

露かけて霞になひく柳かな

風をよはみつゆ吹むすふやなき哉

勝峯本此句なし

露にかせこゝろをきけるやなき哉

袖ふれよはなにくらさぬはるのくさ

春氷

箕面山にて

つかねをく氷やこきし瀧の原

春月

月いつくそらはかすみのひかりかな

へたてけり月こかけこをうす霞

桃

こめこすはたれかみなもこ桃の花

おくや瀧もゝさくやまのはるの水

花

花もさそ待こしはるのあさかすみ

勝峯本早春の題あり

またれしと花もおもはんみやこかな

またれしやあひおもふ友はるのほな

山中なる庵室にて

花をのみ松の戸しるきみやまかな

諸井本前文なし

はなはけさ松の戸たゝく匂ひ哉

山さむし花のみへけるこゝろかな

諸井本箕面山にての前文あり

ひさかたの空に花さそふひかり哉

勝峯本「ひさかたの空も」こなれり

千句連歌に

見しや花明ほのまかふかすみかな

諸井本「古曾部天満宮千句連歌に」の前文あり

八幡山禱祐法師の坊にて

みさりしや花のあけほのうす曇

勝峯本「花の朝氣の」になれり、諸井本勝祐法師に作る

空よいかにはなは色そふ薄くもり

和漢聯句に

いつかみしそらさへ花にあさみどり

藤原元重亭の會に

はつはなを花のちくさのかさし哉

勝峯本はつはなやになれり

よをこめてさくやはつ花あさかすみ

色にみぬはなの香清しあさ霞

こきませてにほへ花田のいと柳

勝尾寺の會に

みねや花鳥のこゑきく太山かな

諸井本前文「勝尾寺の山寺に」となれり

榮根寺にて

鳥の音を太山のはなのこゝろかな

花の色をあらしにかすむ深山かな

勝峯本花の香となれり

春ををきて霞の花の高根かな

播州光明山の城にて千句まで申侍しにつかはしける

わたつみにひかりを花のたかね哉

勝峯本前文なし、諸井本播州光明山の城にて千句連歌まで申侍につかはし侍る

あしやの平正頼城にて

わたつみの春のかさしや四方の花

勝峯本蘆屋正頼が城にて、諸井本蘆屋源正頼城にてとあり

龍田社にて万句の連歌發句を申侍しに

たてぬきにかすみを花のにしき哉

勝峯本立田の社にて萬句に、諸井本社にの下のし。連歌の下のの一字多し

花は世にしめの外なき句ひかな

水かけにぬるゝも花のたもこかな

花を袖ゆたかにつゝむかすみかな

はなに入山は千人のやこりかな

勝峯本この句なし

しげ山に見へすやこゝろ花の陰

こゝろなをあらまほしきや花の春

かそ色の雨ややこりし花の露

ここの葉のかそいろやこの春のはな

花の雲袖ひくみねのかけちかな

吉野山に入し時

なへて世のはなもや匂ひよしの山

勝峯本前文なし、諸井本吉野に入し時とあり

しら雲を春やしきしまの花さかり

草庵にして千句連歌に

はるのほないは、心のちしほかな

勝峯本前文「草庵にて」とあり

かきくらし風もかすみも花さかり

諸井本、勝峯本初の五字よきけらしこなる

さしもへぬあひおもはしや春の花

諸井本、勝峯本此句なし

いくちしほ色そふ花に世くのはる

菅原重行知音の事侍しかはかの所にて

わするなようへしを花の世々の春

勝峯本前文藤原重行さる事侍し御集にてとあり

ならにまかりし時

猶いくよみやこをのこすはるのほな

攝州金龍寺にて能因法師の歌を思て

鐘のをこ花にむかしのゆふへかな

法華讀誦のかたはらにて万句連歌侍しに

勝峯本法花讀誦所にて万句にの前文あり

法の花にさきあふ春のみきりかな

攝州神呪寺にて

ぬる雲の花にちりいつるたかね哉

同國如意寺承英僧都坊にて

いへはににみればちるこそ春の花

勝峯本前文「同國如意寺にて」となれり

ちりちらす花は彌生のにほひ哉

諸井本此句なし

藤原正盛宅にて

心みじんあらしの花のゆふへかな

諸井本正盛亭にてなる

たれか世の花になひかぬあらし哉

諸井本勝祐の坊にしての前文あり

おもはしよはなに朝露朝あらし

勝峯本花の朝露となれり

河邊なる所にての會に

一はなもおこせしけみのほるの水

勝峯本前文なし

初瀬にまうてける時横田坊にての會に

ゆくはるや花せきおこすはつせ川

勝峯本前文「泊瀬詣て權明坊にて」となる 諸井本「會に」の二字なし

自然齊宗祇ために珍全法師せし會に發句すへきよし申侍しかは

をくれしを思ひをかしゃはるの花

諸井本宗祇のためになれり、勝峯本は前文自然齋の三字あるのみ

宗坡法師身まかりて後宗碩かのために句をこ申しかは

しのふにもあまるは花のゆふへかな

諸井本「宗碩かのための會に愚句をこ申せしかは」となる 勝峯本は「宗坡法師まかりて宗碩會に」となれり 尙勝峯本は花ののにほひかなとなる

或人追善名號連歌に

なきこめぬ鳥さへ花のなこりかな

勝峯本「或人追善に名號連歌を」となる 諸井本追善名號の連歌に作る



櫻

さそはれん花や八千種はつきくら

さほひめやはつそめにほふ花さくら

空にしるやはつ花さくら風もなし

さくら色のにほひや柳あさみこり

かさし行里や花そのさくら人

さけはこふ人をやうらみ山さくら

櫻戸やこふもいさよふ山路かな

さささかすちさこや春の花さくら

尾張專興坊興行の會に

こほれても花やあさつゆ八重櫻

勝峯本諸井本ともに前文なし、諸井本花をりしあさ露こほす八重櫻となれり

ささくらせ春のよそひの花さくら

風もなし四方をさくらの春日哉

布留にて法眼胤實せし會に

さく藤に春なまかせそをそ櫻

燕

勝峯本の前文「布留の會に」諸井本「布留にて法眼胤實すゝめし會に」とあり

雨の日をかたる軒端のつはめかな

梨花

諸井本「燕を」となる

雨や色かたやまなしのあさしめり

苗代

苗代に鳥も秋まつあさりかな

伊勢より三河へ下りし時

ふねわたす大淀をき春日かな

勝峯本伊勢より三河へかよふ時の前文あり

雉子

ほろくご朝露はらふきゝすかな

雲雀

夕ひはり芝生をはなのやこり哉

堇

つみくらせすみれや春のはなかたみ

藤

おる袖やこきすりころも藤の花

躑躅

藤つゝし春行やらぬ山路かな

勝峰本には暮春の題あり

歎冬

やまふきにゆく水きよき垣ね哉

にほひそふけなや山ふきはるのそて

暮春

花の春わか葉にくれぬ園生かな

おもはずやつきの残すも花のはる

諸井本なくさめよ月の残すもとなる

宗勳入道亭の會に

残れはるみねを思はんはなもなし

攝州惣持寺万句連歌

くれのこれさきちるのちかはなの春

勝峯本前文「攝州万句に」となる

暮はてはちるよりもおし花のはる

うらみしよ花鳥にくれし四方のはる

藤原員繼申沙汰の千句

花にこひ春もいまはの三月かな

諸井本前文句ともになし、勝峯本前文なし

かへるさこあらはそうらみけふの春

攝州若王寺曉應法師にて閏月に

諸井本勝峯本ともにこの前文なし

をくらすもやよひを花のなさけ哉

あすはさてけふわかることも花の春

玉津島社に参詣せし會に

春をやはわかのうらかせ松の聲

勝峯本の前文、玉津島社に参侍し春の會に、諸井本「社にまひりし後春の會となる」

春の千句中に、源頼豊城にて

あひおもふやこりやはなのかほよ鳥

勝峯本の前文春千句の題にてとなれり

藤原正種九十歳の春の會に

百こせにみつこも遠しちよのはる

勝峯本題雜春、藤原正種九十の春の會となれり

松のうへになをいくちこせ宿の春

丹波の國にて

しるや春經にけん松のちこせ山

勝峯本丹波にて興行にとなれり

なにはにて

四方の春さは、やどりやなにはかた

藤代にて

八十嶋やしたにみさかのけるの海

夏

餘花

うすにほひ花をうつしのわか葉哉

勝峯本、諸井本ともに前文なし

新樹

藤なみにうす色いつれなつ木立

くれなぬの朝露にほふわか葉哉

世にしらぬくち葉やかへる夏木立

いくむらも山はわか葉のにしき哉

勝峯本いくむらも山も若葉となれり

深山路にしければつもろおち葉哉

勝峯本、諸井本深山路やとなれり

山崎にて

しげるらし川かせおもき柳哉

若楓

朝露の玉こきちらせわかかへて

諸井本勝峯本前文なし

橘

たちはなにもたれてにほふさ月哉

ここかへてはなは橘のにほひかな

勝峯本、諸井本橘のかほりかなとなれり

仙人のやこやたちはな花のかけ

卯花

卯の花やひかりけたれぬ朝月日

卯月のはしめ子規を

まちもあへぬ宿おころかせほこきす

勝峯本題「郭公」諸井本「卯月のはしめに子規を」となれり

泉州万句さて申侍しに

またしかしもりはしのたの子規

勝峯本前文「攝州にて萬句に」諸井本「泉州萬句連歌につかはし侍し」となる

またしはし深山やはつねほこきす

聲うこし人をたにこへほこきす

丹波より人の申侍しに

聞のみかおもふもみ山ほこきす

勝峯本「丹波の人申されしに」となる

攝州萱野如林草庵にて

まつ人にみねここのこせ時鳥

勝峯本「攝州如林草庵にて」となれり

ほこきす忍ひねふかき外山かな

たひねともおもふな都ほこゝきす

しのひつまあふちややとり子規

絃をたちし琴をやおもふ時鳥

花にかもおりみんはつねほこゝきす

攝州拔並藏真庵にて

たかき名よみらはいつれの郭公

ほこゝきす聲に玉よる渚かな

をちかへれ山は瀧なみほこゝきす

河州逆巻にて

たか五月たかあけほのそ郭公

泊瀬山にやとりて

二本のすきかてにせむ郭公

鹿背山の寺にて

山もやま雲のやこかせほこゝきす

山家にまかりし時和漢に

かへらしのやまちこはれほこゝきす

獨吟に名號連歌し侍しに

なかは人かへるよもかなほこゝきす

夏月

はなに見は月やあさかほ夏の空

勝峯本名號連歌獨吟に侍るにとなる、諸井本名號の下にのの一字あり

諸井本はなに見るとなる

杜若

つまこめて郭公までかきつけた

諸井本妻こめに花をやかこふかきつはたとなれり

菖蒲

軒をかきりたもこにほはす菖蒲哉

勝峰本前文菖蒲をとなる

花かつみわかぬにほふあやめかな

ひさかへるあやめにきよき汀かな

かり枕ねよけにほふあやめかな

早苗

聲の色もわかかなへさそふ田歌かな

五月雨

ならにまかりし時

さほ山やさみたれの雲のみおしるし  
さみたれもしつくにおつる深山かな  
五月雨は行あひならぬ水もなし

蟬

蟬のはにたもこ吹なせまつ風

百合草

つよからぬすかたを花のさゆりかな

勝峯本題「百合」とあり

若竹

朝露も置しらぬ竹のわかばかな

諸井本前文「若竹を」となる

螢

むらさめにひかり涼しき螢かな

水鶏 中嶋と云ふ水郷にて

蘆のやにまさの戸たゞく水鶏哉

諸井本此句なし、勝峯本、中嶋野里と云ふ水郷にてとあり

あさねすこ月に宿こふくねな哉

海松 尼ヶ崎にて

吹來ぬをみるふさ涼しおきつ風

勝峯本海松の二字なし

夕立

ふきむかへこをつ白雨まつのかせ

ゆふたちのしらたま涼しむら柏

撫子

ほのほふはなや撫子のまゆこもり

諸井本、勝峯本撫子まゆこもりとなる

夕顔

ゆふかほにしつやすきうき垣ね哉

諸井本しつやすきうきゆくてかななれり

泉州堺濱引攝寺にて蓮を

しら玉の露みかきますはちす哉

勝峯本前文蓮泉州堺寺にてとなれり

扇

こゝろもやにほふ扇に三重かさね

攝州三宅稱願寺梵阿張行

天つ袖かへすやあふきと朝の月

諸井本前文の終梵阿張行の會にとなれり勝峯本前文攝州三宅稱願寺にてとなる

永正十一年七月十一日夢中に



雪しろきあふきの風や富士嵐

勝峯本『永正十七年受中に』の前文あり、諸井本七月十一日の夜夢中にとなる

納涼 井手のわたりにて

袖の上のたまみつ涼し井手の里

諸井本の前文井てのわたりにて、納涼となれり

はころもをこの世にすゝし天津風

藤原正棟亭にて

のこれ月かつらのかけの朝すゝみ

勝峯本前文『藤原正棟亭にて』とあり諸井本前文なし

攝州原の山中平元信館にて

ふかぬ間を待程すゝし深山風

諸井本原山中平元信館となり、勝峯本攝州原の山中にてとなれり

桐の葉にしられぬ秋や下すゝみ

住吉社法樂に

聲かはす松の葉すゝし奥津浪

諸井本前文住吉社法樂會にとなる、勝峯本前文なし

山居の人の會に

風も露ももらて涼しき岩屋哉

勝峯本此句前文ともになし

泉川の邊にて

むすへ人これやこゝろのいつみ川

諸井本前文『泉州にて』となり、勝峯本は『泉州ほとりにて』となる

こし水さいふ所にて

ぬきちらせ影はいつみのたま柳

いさら井清き所にて

うこきなき心をむすふ清水哉

勝峯本いささ井近所にての前文あり、諸井本は『元重亭の連歌に』とあり

雑夏

名もしらぬにほひも花か五月山

五月のころ山家にて

はるあきのやまもりこを見よ五月山

なつの句の中に

花さいへはおもふむばらの垣ね哉

諸井本夏の發句の中にとあり

祇園會の日法樂連歌に

竹の葉のしらゆふすゝし神祭

勝峯本祇園會日法樂の前文あり

夏引のいこをちいろの一日かな

諸井本『六月比正盛亭にて』の前文あり

たゝら興房旅宿にて六月の比

ここの葉に夏の草木の雨も哉

勝峯本多々良興房旅宿六月にとなる

富士の山を見侍しに

きへてふる一日や夏のふしの雪

諸井本前文『富士の山を見侍て』となり、勝峯本『富士を見侍し時』となる

水郷のやまりにて

三嶋江や風も秋まつあしへかな

勝峯本『水郷宿りにて』の前文あり

秋

七夕

ちきりしや神代のいもせ天津星

うきはしや夢に行合の天の川

諸井本前文「源正頼亭の會に」とあり

月もすめほしあひ忍ふあまの原

勝峯本此句なし

ほしあひや世のいつばりをいむ夜哉

蟬の聲しけみに秋の一葉かな

勝峯本しけみを秋のになれり

うつろいてちるも千入の一葉かな

秋かせにちるをばななる柳かな

宗碩法師性繁入道上人連歌に

すすしさやけさからころもたつた姫

諸井本前文「宗碩法師性繁入道と三人せし連歌に立秋のころを」とあり勝峯本立秋宗碩性繁入道三人連に

袖すゝし秋はにし風夕月夜

諸井本、勝峯本「秋ははつ風夕月夜」となる

蠶

日くらしに契かをさし秋の露

勝峯本、蠶、諸井本「日くらしを」の題あり

萩

そらの色やこたへは秋の萩の聲

勝峯本萩千句にの題あり

朝きりに夜ふかきかせやおきの聲

萩にさへのさけさや世の秋のかせ

此句勝峯本、連歌大發句帳ともになし

風よはしやなきちる江の萩の聲

自然齋忌日承英僧都坊にして

そよめくやけふのふるこも萩の聲

桐

勝峯本『自然齋忌日水冥伊都所望に』諸井本『承英僧都の坊にして自然齋宗祇忌日の連歌に』の前文あり

桐の葉やこころのやこりあきの風

諸井本前文『播州さはかしかりし比、播州吉川といふ所に侍りて惠全草庵にて』とあり、勝峯本『播州吉川と云所惠會庵室にて』となる

和漢聯句に

きりの葉に秋の日うすし雨も哉

勝峯本前文なし、諸井本『和漢の聯句』となる

萩

花もまたむらさめ涼し萩の露

萩の露はなにあらそ下葉かな

自然齋十三回忌に千句連歌彼庵の舊跡に宗碩住持しにて南無大日覺王を發句のかしらにをさける第二に

むすひしや萩もふるはの秋の庵

諸井本前文『連歌後庵の舊跡に、大日覺王といふを發句かしらに』とあり、勝峯本の句『花も古枝の萩の露』となる

風や秋かさねすすしき虫の聲

鹿

しかのねやいくへのごやまはつもみち

ふけぬるか月に鹿なく門田かな

朝霧にしかのねちかき門田かな

勝峯本此句なし

雁

かりもなけ空はみこりの秋の雲

勝峯本秋の海となれり

おもかけの聲やはつかり天の原

程をき所より來し人の會に

こをからぬ千里やこゝろ秋のかり

勝峯本前文「程遠き所の人會に」とあり

都にのほりし時の會に

雁も今あさたつ旅か萩の露

勝峯本前文「都のほりし時會に」とあり、諸井本雁もけさ朝たつ旅か萩の露となれり

雲に雁はらははてかはす羽風かな

玉つさに、ほふやはかせ秋のかり

諸井本、勝峯本此句なし

鳴

たつ鳴を刈田にまねく薄かな

蚕

きりくすねぬよをあかぬあさけ哉

菊

つくろはてさくをやまたん庭の菊

つみのこせけふは待みつあきの菊

から衣をりぬふきくのかさしかな

水かけやわかうへそふるあきのきく

濱ひさしあまりてにほへ秋のきく

都より人の申侍しに

霜いくへ九のかさねのあきのきく

諸井本前文「都より人の所望せしに」とあり、尙霜いくへ九かさねとなる

うす色や花に時雨しあきのきく

行秋やかへりてはなを宿のきく

紅葉

あさきりこ見しや時雨の薄もみち

書寫山にて

下草や霜をうらみん初もみち

諸井本前文書寫山にて紅葉をとなり、勝峯本紅葉、播の書寫にてとなり、勝峯本露をうらやむとなる

うすもみちかた岡かくるあき田哉

たかためそ時雨くしはつもみち

こきませてにほふや野山花もみち

勝峯本にはひやとなれり

「凡友松すゝめし戀の百句の連歌し侍りしに

ちらすなふ秋にこゝろの初紅葉

諸井本前文「戀の百句連歌侍しに」とあり、勝峯本千句すゝめられての會にとなる

をくやたれ露をは山のからにしき

源政定亭の會に

世におほへ山は時雨のからにしき

諸井本前文「源政定亭連歌に」勝峯本源の政定所にてとなる

をり出せやまもみつきのから錦

箕面山中にて

山は秋を都のはるのにしきかな

諸井本、前文なし、勝峯本箕面山にてとなる

淀の里にて

川霧にちらてもうかふもみちかな

はりまにくたりし時源貞次せし會に

海かけてもみち葉なかせしかま川

勝峯本前文播州へ下り時となり、諸井本は源貞次の源の字なし

おしましよかつはちりてのした紅葉

莓の上にかせこゝろある紅葉哉

諸井本、勝峯本苔の上にてなれり

白山を見て九月の比

もみち葉に越のしらねや秋の雪

諸井本「長月の比しら山をみて」とあり

山水のもみちせきいる、かり田かな

諸井本、勝峯本せき入るとなる

庵室にての會に

秋はきぬ身をしら露の初紅葉

諸井本は久しく日てりせし時、攝州萱野神社にての法樂に「空にしろや雨をのそみの秋の雲」の句あり  
て次に中一日ありて大雨ふり侍りぬ、庵室にての會にと前文あり、これに對して勝峯本は「次の日雨降  
き」とあるのみ

行秋も山こへのこせをそもみち

秋時雨

九月をみやまや秋のはつしくれ

色なしこ松にやは見ん初しくれ

たか秋に間なく時雨のみねのまつ

こゝろやは時雨もくれのあきの聲

初しくれ秋よりふかき夕かな

風も露もくれてを秋の草木かな

九月盡

秋はけふいこゝあつまの雲おかな

諸井本、勝峯本此句なし

こしのをの長月しるし世くの秋

諸井本、勝峯本此句なし

月草につみしや日かすけふの秋

勝峯本、諸井本此句なし

したふともあこや雲風けふの秋

勝峯本、諸井本此句なし

行秋のうらみにしのふ木々もなし

諸井本、勝峯本此句なし

かこつさへ月たにいつこけふのあき

諸井本、勝峯本此句なし

雑秋 攝州丹生寺にて

世にしらぬ秋は横たつみやま哉

ひさしく日てり侍し時攝州萱野神社の法樂に

空にしるや雨をのそみの秋の雲

次の日より雨くたり侍き、なきさの岡見侍しとき

松のうへはなきさも秋の岡邊かな

諸井本『なきさの岡にて』の前文あり

和泉堺にて

色に見よ初しほかせのあきのころ

諸井本泉堺にての會にとあり

天王寺にての千句連歌に

うらかせや名には思はず秋の海

諸井本前文天王寺にての千句に勝峯本天王寺にて千句とあり

播州室の津にまかりし時

色ならぬころも秋やむろの海

勝峯本前文播州むろにて、諸井本前文播州室の津にやすらひて、勝峯本『心も秋の』となれり

同國小塩河邊にての會に

又や見んすむをちこせの秋の水

勝峯本前文同國小鹽川にてとあり

のこけさや宿から松に秋の風

社頭を拜し奉りし時

松のをのしらへや手向あきのかせ

勝峯本社頭を拜し侍し時の前文あり

自然齋十三回忌宗長宗碩なご張行せし會に

天かける玉やこのころあきのかせ

諸井本承英僧都の坊にして自然齋宗祇忌日の連歌に『そよめくやけふのふるこ萩の聲



の序と句とありて次に「おなじ第三回忌に宗長、宗碩など張行せし連歌に」の前文あり  
獨吟法樂の連歌に

秋に風なひかす四方の草木かな

勝峯本「早秋、獨吟法樂に」とあり、諸井本「獨吟の連歌に早秋」となる

山家の旅宿に

いさゝしや山はむさゝひあきのかせ

勝峯本前文「山家旅宿にて」となる

冬

時雨

高根こせすゑも都のはつしくれ

田舎にての會に

こころふや真木の屋のみの初時雨

こからしや心くのはつしくれ

里なれよ外面のならの初しくれ

夕月夜しくれに更しひかりかな

攝州能勢郡月の峯こいふ山寺にて

ふけあらし時雨し月のみねの松

諸井本前文能勢の郡月となれり

松の葉にみればいくたひ初しくれ

天満宮法樂に

ふかみこりいかにしくれの一夜まつ

勝峯本「天満宮にて」とあり

尼崎にて

浦つたひ松をしくれのたよりかな

勝峯本 前文「攝州尼崎にて」となる

清水寺の會に

陰ふかし木葉しくれのをこばやま

勝峯本、清水寺會にとあり

交野のほこりにて

ひこしくれかたのに、ほふ夕日かな

勝峯本 交野ほこりにとなる

明石にこまりし時

すみかきに夕しくるゝゑしまかな

勝峯本、諸井本「明石に下りし時」となる

いなみ野にて

いなみのやこりあへぬまのしくれかな

殘菊

たれか見むさく紅葉、を冬の庭

勝峯本 初冬の題あり

木の葉にもさそはれぬ花や庭のさく

落葉

花なかすこたへも浪のこのはかな

ちるらめや時雨をみねのした紅葉

河州尊延寺にて

そめしよりちるや木葉のむらしくれ

諸井本「河内尊延寺にての會に」の前文あり、勝峯本「河内尊空寺」とあり

色こきはちるもさそはぬもみち哉

神無月ちりかひのこるもみちかな

河州一宮の會に

ちりてしく紅葉やこゝろから錦

勝峯本河内一宮にての前文あり

よるや霜もみちを四方の朝あらし

箕面山にて

色こきやかしの葉にちる深山かな

まつやたれもみちむしろの夕嵐

しるしらす風はわきけん木葉かな

山寺に侍し會に

ちりちらす心すむ山のこのはかな

勝峯本山寺に侍りてとなる

草庵にて

木葉さへをこせぬ庵のゆうへかな

のちせやまにて

かせや色月におちはの後瀬山

諸井本後瀬山にしての前文あり

吹まよへ上げくちはのあさあらし

兵庫津にて

ふきまよへあらしの木葉いそ千鳥

勝峯本前文「兵庫にて」となる

攝州みそくわに侍柳江申侍しに

こもり江にちるや紅葉の朽木書

勝峯本攝州みそくわに柳江と云所にて

自然齋うせ侍ての冬觀世音の名號をかしらに置ての連歌に

名やは世にくち葉もおしき木陰哉

勝峯本前文「自然齋うせ侍りて觀世音名號にて」とあり

播州曾禰といふ所にて松の枯木あるを見て

陰ふかし世はこからしのいはね松

勝峯本「松の古木有に」の前文あり

太神宮法樂の會に

霜の松あふけはたかしかみち山

勝峯本、霜、大神宮にて法樂となり、諸井本「太神宮法樂會に霜」となる

あかす見よ月やはわかぬけさの霜

外良祖田亭にての會に

霜あさのかれ野のはなの鳥の聲

勝峯本、外良祖田亭にてとなる

草庵にして

さゝの葉の音もたよりの霜夜かな

諸井本「草庵の會に」とあり、勝峯本、草庵にてとなる

海邊にて

空は霜夜こほらはいくへ冬のうみ

八重ふきは霜を軒はのあしへ哉

冬月下つかたの京にて

玉ほこのこほりや月のあさわたり

諸井本「しもつかたの京にての會に冬月」の前文あり

志賀にまかりし時

さゝなみやこほりは月のみきは哉

諸井本「志賀にて」となる

蘆屋にて

月寒しころは有明のあしやかた

寒草

しもかれや秋ををきてのむら薄

勝峯本、冬ををきてになれり

氷

兵庫にて

うらなみも氷をおしめみなご川

諸井本『兵庫にて氷を』となる

霰

萩の聲あらしものこすあられ哉

諸井本『霰を』となる

しら玉にあられぬきみたる薄かな

ならのはやこは、あられの笠やこり

兼載法橋追善名號連歌

名たゝるもふるや夢の間玉あられ

勝峯本『兼載法橋追善名號連』の前文あり

丹生寺にて

木葉ふみあられを袖の山路かな

諸井本『攝州丹生寺にて』となる

もてはやす木葉やをのか雪あられ

諸井本『もてはやす木草や』となる

霰

夕されは松の葉しろきみそれ哉

諸井本、勸修寺雅教僧都の坊にて霰をの前文あり、勝峯本、みそれ、勸修寺雅教僧都にてとなる

雪

ふりそふこみするやゆふへ峯の雪

諸井本『藤原正盛亭千句連歌に』の前文あり、勝峯本、正盛か亭千句にとなる、尙、諸井本、勝峯本ともに、『みするや夕雪のみね』に作る

雪を

あは雪のみねにやのこるはつ紅葉

勝峯本題『雪を』の下に十月の比とあり、又『みねにのこるや』となる

槐林寺にて

ちる雪もおしめしけ木の下紅葉

勝峯本「桂林寺にて」の前文あり、諸井本前文なし

有馬湯山にて宗祇宗長三人せし連歌に

うす雪に木葉色こき山路かな

勝峯本「有馬湯にて、宗祇宗長三吟に」となる

ふるこみし嵐の花や今朝の雪

諸井本、勝峯本ふるもみしとなる

雪いつくちらすは雁の羽吹かな

諸井本「都に出侍し時」の前文あり

雁ひこり聲すむ雪のゆふべかな

諸井本此句なし

しら雪を都やゆくゑの年の雪

人にかはりて

いさよふはさそひし雲か雪の峯

たまさか山の邊にて

たまさかの雪は名におふ山邊かな

住吉にて

またしげさ遠里小野のみねの雪

諸井本「住吉にて侍し會に」の前文あり尙「またしげさ遠里小野に」となる

西宮のわたり平正頼城にて

雪はまたこを山あをし紀路の海

諸井本西宮のわたりこし氷正頼亭にてとなる

住吉にての會に

うす雪にこゑうちそへよ松のかせ

風もなし初雪かゝるみねのまつ

藤原元親亭にて

さえ一夜の月もしらぬ今朝の雪

ちりて花さくや草木のけさの雪

勝峯本此句なし

待くらしかれ葉にならのけさの雪

勝峯本「待けらし朽葉にならの」となる

風なからあは雪かるしむらかしは

よるそ見へぬるゝや雪のむらかしは

諸井本よるそみんぬるゝや雪のあさ柏となる

いはね松小草も雪のすかたかな

藤原正棟亭にて

山水に雪の聲きく木間かな

諸井本「正棟亭の會に」となる

正盛亭千句連歌に

ふりそふと見するや夕雪のみね

此句前に出づ

長洲にて侍りし會に

浦かけてふりつゝ雪のなかすかな

諸井本前文「攝州長洲にて」とあり勝峯本「長洲にて」となる勝峯本「ふり行雪の」となる

分てみは山やうす雪みねのまつ

諸井本、勝峯本山やうす雪うらの松となる

遠國へくたる人のせし會に

雪はれてなきたるあさのふなちかな

勝峯本遠國に下る人所望とあり

さやの中山よりかひかれを見て

おもひこしかひのしらねよけさの雪

諸井本さ夜中山よりかひかねを見わたしてとあり

待やたれ雪こそ四方のはなの春

近江入道宗揚悼の連歌に

なきかほせ霜に友なきかりの聲

勝峯本前文「近江入道宗揚連歌に」句はなきかほせ雪に友なきとなる

千鳥

浪になき雪をつはさの濱千鳥

諸井本波になけ、勝峯本雪になけとなる  
ゆくちり八こせ一こゑはまひさし

神樂

うたふ夜のみてくらさゆるあらし哉

諸井本「正盛亭千句連歌に神樂を」の前文あり、勝峯本、神樂、正盛亭となる

早梅

梅さけと冬草あをむかきねかな

ふゆに春入江はうめをみきはかな

梅かえもまたてさけこやばるの水

諸井本、攝州榎並といふ所にて、勝峯本、攝州藏真庵許にてとなる

北野にて

こころをき春をうちふけ梅の花

勝峯本「春をこちふけ」となる

雪をうめにほひにうつむ冬野かな

春を待そらたきならしむめの花

諸井本此句なし

梅のはなくれてこころしのにほひ哉

咲てくらす年はおしまし梅の花

雑冬

ゆきそみつさきしもはなの沖つ浪

勝峯本ゆきにみつとなる

ささちるやなみこそはるは冬の海

勝峯本なみこそ花は冬の海となる

紀伊國にくたりしに海上の眺望を

のころ日も冬は玉ゆうのみ崎哉

勝峯本紀州へ下り海上の眺望をとなる



和泉塚にて

わさ蕨にかるやあしたつ雪のかけ

天王寺にて

ひさはなにふかきや梅の冬こもり

住吉にて

またし春をささこをのも梅の花

以上三句諸井本のみありて他本なし

寛文六稔仲秋吉旦 長尾平兵衛開刊

夢  
の  
名  
残

俳諧歌は紀氏にをこり、俳諧の連歌は宗鑑よりなれりけり。されは淺香山を  
わけ、佐保川にのそめるともからもすてす、これをくちすさふ。中にも貞徳  
宗因ひたり右につゝきてその言葉名にあらはれ、その吟なさけ布かゝりしか  
は、ふたつのなかれひろこりてまなひたつさはらすこいふここなし。敷島の  
みち行ひと和歌より連歌より俳諧よりすかたここなりこいへともおもむきあ  
ひわかれす、高さよりひきゝをさとし淺きよりふかきをはかれるかここくに  
これかれかよひてたかひにもてあそふなるへし。こゝに文龜の御代に肖柏法  
師といふ人あり津のくに池田里にかくれて夢庵をつくり、みつから牡丹花を  
名とす。時の人したかひてよふに夢庵こいひ牡丹花こいふ。出る事あるとき  
はかならず牛にのる。かねてこかねをして角をかさる見る人あやしみわらへ  
ともみつからこれをばちす。はやうよりこゝろのかさねのいつゝの山にあそ  
ひて唐のうたを詠しくさくゝのたまの庵のまこのまへに大和ここの葉をつら

ねわきて新治つくはの道をしれり。詠しいたせる詞いゑくゝの集にこゝま  
り、ゑらひをけるふみ世にあまねし。おほよそこれらのこゝちかく林なにか  
しは本朝遯史にしるし、深草のひしりは扶桑隱逸傳にあらはす。かつ常のこ  
こくさなりし花と香と酒のみつは三愛記にて建仁寺龍崇せんし、また夢庵み  
つから筆をそめらる。すてにふた卷の詞にもるゝこゝなきによりてくはしく  
これにのせず。永正七つのごし中の秋十日あまりひご日の夜すへらきの御夢  
にまみへかしこきえい慮をおそろかしけむ。ごしこゝろ夢庵ごよひしもかゝる  
へきさごし也かし。内大臣實隆公そのこゝこのまごゝをしるさせ玉ひ、相國寺周  
麟せんしおなしさまのこゝ葉を作らる。こゝまやかにはこれもまたそれらのふ  
みにゆつりぬへし。抑はる秋のやごりごをみよ五月山ごいへるは夢庵にての  
詠吟ごそ。あはれいくその春秋をかへぬるいほりのあごは竹のはやしごなり  
て、けに夢の名の残りりける。和漢のさえある人くゝ懷舊のこゝろ花の色

くゝにこゝは玉の聲くゝに夢のうきはしうちわたしつゝいひいつるこゝたえ  
すなむ、それか中にわさこそうたおほくきこえず、いはむやしるしあつめぬ  
るあごなごり家里。我里寛文に屋勝あり、貞徳の流なり。延寶に西夕西舟あ  
り、宗因の質なり。これらのゑらひにもれて海棠か時にあへるににたり。し  
かのみならず祖父か隱室あり、惠林禪師なつて夢遊居ごす。つたえてこれ  
にすめり、されはその名もひごしくまた春をもてあそひ秋をこのむをりかた  
くゝにつけつゝかの庵の夢のなごりをしたふごいふ。やかてこの集のなごせ  
り。あつめゑらふごこゝろ牡丹を卷のはしめごし、三愛をしるして、牛をいた  
し、夢庵にごなりて夢遊居をそふ。すへて六まき。寶永二年四月四日にしる  
しをばりぬる

作者しらす

名をおもひしたふ心に牡丹

夢名殘俳諧集 卷一

牡丹句

寄牡丹懷舊

こりはやす名の水上やふかみ草

橋鳥にその夜しらく

見るこはや無理に飲たひ顔ありて

かれと吳服の定規の争ひ

暖にくれりと替る冬の空

逢はすむ事狀に及はぬ

月くゝに有明比のおもしろさ

鉢か一枚蛸か一坏

海 東 來 文 珉 田 諷 矩  
棠 行 山 十 子 風 竹 久

奥嶋を着れば悉皆手代也

庭のしまりに直す木斛

業平の母も此こそ見まくほし

さつきの菓子て干す空のない

桑津からは是程までは出ぬつもり

和薬作りと人や云ふらん

吳竹を撫るばかりの風を待つ

ほれらたいか白い袖口

亂かれた嶋田に成と結てたも

何に置けとも露はあこしい

此筆に卷残されて夜の鹿

茶磨山から須磨へ入る月

一 執 東 海 文 來 田 珉 矩 諷 海 一  
禮 筆 行 棠 十 山 風 子 久 竹 行 山 十 禮

初花にきのふの雨はたちかしら

雛か見へぬと居士衣振ふた

美しい汐千の足を突出して

すげた町にも五間口あく

薫來る風に浮世の塵かのく

源氏箱やらこりちらしぬる

冷食に煎酒つけておもしろい

堂んたら筋の船は筑前

是程に艾かためててつかてか

底へ手かけて錢の引出し

旅見れば慈圓も笠に竹の雨

負てのいたも一年に成る

珉 文 來 東 諷 矩 一 田 文 珉 東 海  
子 十 山 行 竹 久 禮 風 十 子 行 棠

きたないは茶漬にまよふ戀の闇

おどれしやれにて跡はがつぱり

見やれ月浪の中から洗ひ出す

大名客を送るひやゝか

鞠の場へこれやあんまりな散る柳

ちつそはあれと観音を持ッ

よい年てしやうく云やる小くらかり

もめて四月の出替りを泣

雑水に鶴の郡も貞を見る

はやい衆から稽古めされい

賀の初過て心の花か咲

どちらへ往ても梅は津の國

來 山

一 禮

田 風

諷 竹

來 山

文 十

田 風

珉 子

東 行

海 棠

一 禮

諷 竹

廿日草扱四五日や春の花

菴富人里にわけ根のふか見草

勅名の外はほたんのうき名哉

白玉も紙燭よせけり冬牡丹

いにしへやほたんに乗つて空の雲

濫觴の殊にゆかしきほたん哉

おもかけの頭巾にほふや紅牡丹

梅 翁

京 信 德

同 如 泉

同 言 水

同 我 黒

同 好 春

同 方 山

箔盃にむかし料理や初牡丹

同 鞭 石

こやさしき浪人衆や牡丹圃

同 雲 鼓

夢の名残にこたふる詞

仰のこころ本朝遯史隱逸七十餘人の傳古今の名實としてその徳一指をもれす  
一句萬世の芳香たり、春さかぬ心や花のふか見草はしめは色もや花のふかみ  
草と聞えたる句也しこかや艷美三月三十日楊柳桃李の天工をつくさしめて草  
にも木にも無き萬花の君さかしつかれ將軍花を列ねたるいきほひ誠に夏の面  
を起しりれば世人句にめて、花翁さよふ今はた申も心得かましくて牛蹄に硯  
の水をたゞ沁んこするに三愛の一盃自然にしたはれ侍を筆にまかす其紅いつ  
れこいふ事を名さす花ふさの心よきにさく

さ、はうし角に燈ともすふか見草

江戸其 角

太白沈香亭程に題せし後牡丹を弄ふ人はたそや攝の夢庵老人也常に花香酒の  
三つを愛して風雅に逍遙す尤和歌に通し連歌に達す又五岳に遊んで唐詩の趣  
を聞く故に其旨を能せしこなり

八百世賡け牡丹麻の韻花の文字

同一 晶

古庭に有きたりたる牡丹かな

同 嵐 雪

霜かれのむはらの末を見捨こや我草花の中にくたにを題して

櫻子の後はあくたに植木賣

同 沾 徳

夢庵の後主かの名残の秋を六題にして撰へる中にもほたんに懷舊ふかし野子  
此圖をかまえて折から分外奇なり遠くちなみ近く頼して今古に並ふ且聞漢の  
海棠唐の牡丹花花の名に富りその海棠この牡丹窟

星霜の根にかよひたり牡丹主

同 艶 士

背むく柏は枯てほたんかな

同 山 夕



座所は花の指圖やほたん講

大阪來 山

牡丹見も小扨從達の袴かな

同一 禮

ほたん物いはて故人を知た顔

同諷 竹

牡丹花は實に香を愛し給へりしや酒も香あり花も香ありされはこそ夢さいふ  
庵にはふして金角の牛にはのり玉ふけるやかゝる風流の身より出來たればそ  
のここのははいはんもさらにやなをあやしきは此翁の和泉のさかいをこや主  
はおかぬかしうはおかぬかさいひもて過させしをおきようさんこよひぬれし  
人ありけるそれよりそこにすみ玉ふここのはありこやいふは風流ふも風流い  
まむくさの題にて俳諧のほ句す似けなくは、かりありや

笠の圖のたれや氣にあふ春の道

同その女

所から池田山のあらしも酒家の窓をならして

酒食や曉にほふ寒ほたん

同東 行

物に似て襟本に付牡丹也

同岸 紫

春ならて咲や心のふかみ草こは牡丹花と改名ありしころのここくさにや

廿日にはあらて無盡のふかみ草

同舍 羅

敬ほたんよいうけ物やかつら桶

同文 十

株杭の皮もそこねす牡丹土

京和 海

初ほたん鏡さり出す官女かな

同香雪軒 梨 叟

白くく雲井まで召す牡丹哉

同一 奥

國の名にひらくほたんのめてたさよ

同風 國

さもこそ宵闇悔る黒ほたん

同周 竹

おくそこのなき人なれや白ほたん

同柳 角

塵原や願起の切花牡丹

同一 毛

石橋の御能にあひぬ白牡丹

同和 卜

地黄にも子は出来にけり冬牡丹

同柳水

なけ入れに一本てすむ牡丹かな

同梅笑

うつろふも牡丹を珠に涙あり

江戸止水

夕ほたんさすつて見たり精進服

同琴風

濡椽の低もなる歎ふかみ草

同百里

牡丹花の主をはしめその比の先達等世に七賢稱るありされは無可有の郷に竹

をうへて風雅の美魂たちの遊園となさしめんこす

竹林に牡丹くはへて箔の牛

同風子

大黒と牡丹のせいの低さかな

同專吟

頼朝の鶴のひあかる牡丹かな

同尺草

うつゝなや牡丹病む目に蟻の糞

同蘭水

花もその所によりて榮あるや駒も休み舟もこゝまるの景地也

ひら方や晝を逃さぬ白牡丹

同東潮

義平は陽明門のほたんかな

同每閑

牡丹畑白ある末や暮こゝめ

同唄言

請出の君に牡丹の家守かな

同焉子

揚貴妃を見ぬ日はあれと牡丹哉

同百猿

紅白をあらそふ角や黒牡丹

同堤亭

釣買に斗るほたんの根こき哉

同立朝

海の日を菴へ招く白ほたん

同耕舌

人しらぬ金の借場や牡丹折り

同提泉

白ほたん氷の肌や三日の闇

同渭北

葉の奥にひらく<sup>田</sup>有る牡丹哉

こんごうや牡丹に殿のはき習ひ

同印之

題夢菴牡丹花老人

大阪雪鳩

連歌爲食禪爲飲 騎者踞牛坐結跏

三愛善書看有眼 今之今囉牡丹花

年々に名を咲出すほたんかな

同 沖 風

子をこるこ聞けば牡丹の愧しき

同 海 音

牡丹見てあゝ何かなき色唐紙

同等瑛子 潮 白

聞なれてしかもゆかしき牡丹哉

同 柳 波

花にこりても色上戸ありやなしや

底のない牡丹さいふて白いかな

同 八 虹

太唐に花王に猫をつなきて盛をしる事世の耳にあり我が難波の吉助か商ひ物にこし經て撰屑になるはその中の不幸ものなりあるひは數種を飛ぬけてゆゝしき園に寵を求めめてたき諺に作意せらるゝこそ富貴なる本情もあらはれ非

情の大慶なるへかめれ

去程に牡丹の晝や扇子の手

同左禮門 三 惟

まはれたゝ茶磨のうへの深見草

同 東 里

門跡のたうごかりけるほたんかな

同 愛 貞

松の葉やちりうせすして牡丹畑

同 芙 雀

たれかある牡丹畑のはなれ駒

同 榛 國

牡丹見やきたなき皺に面ンかけて

同 我 亮

鶏にまたおこされて牡丹かな

同 灌 佛

提て出るほたんくるひの茶瓶かな

同 吞 江

しほらしき牡丹やなんこいふ庵を

同 扇 芳

地はたから種子は残りのほたん哉

同 保 直

一ト庭の匂ひかたるや白牡丹

同 風 磨

四季咲のほたんやあると花やかた

同 悠 川

仕合や天氣あかりて廿日草

同 李 投

貯酒底たゝいたりはつか草

同 大 鷗

によつと日の鏡に笑ムや白牡丹

同 鷺 岸

つどくくに朝日のそむる牡丹かな

同 紫 英

脇指はおとしさしなり牡丹見に

同 常 女

すけなふに見へて位のある白牡丹

同 久 女

紫牡丹よむかしの人は直なり

伊丹 濁 水

茂庵こは牡丹の事とおほしめせ

同 百 丸

實植より科弟コケイにのほれ白牡丹

同 人 角

歌よみも誹も頭をふれ牡丹芳

同 青 人

季の果や小町老たるふか見草

同 蟻 道

物にする髭を撫てや白牡丹

同 春 堂

むかし戀しや今は人の心も無下におこりこそすれ

柑子には鎖はおろさし白牡丹

同 鷺 助

人肌になるや小筒の冬ほたん

南都 菊 芳

初咲や出雲へやらん冬ほたん

同 思 外

はつ咲に裏道ゆるせ隣草

同 尚 成

有かたやほたんの名にも八幡白

同 梅 南

あの蝶は今よこれしか白ほたん

同 幾 吟

ほめ所ほめてのいたり牡丹畑

伊勢 芦 本

開戸のきりゝと庵のほたん哉

同 柴 友

御亭主の底なし牡丹咲にけり

同 反 朱

替てから同じ牡丹の咲にけり

同 乙 由

行の道戻りの道やほたんはた  
 三ッ指の跡も見へけり牡丹畑  
 家主の留主には何さほたん畑  
 我々か背戸にはたゝのほたんかな  
 近年の出来ほたん也花ひこつ  
 さしかさて見るや盛のほたんはた  
 古沓をなけし牡丹や花盛り  
 沓かたし目をすりくも牡丹かな  
 拍こいふ聲はのこりてほたんかな  
 日の脚の薄き匂ひやふかみ草  
 むかしこはなりていよくふかみ草  
 落るこころ手向にしたるほたん哉

同 水 甫  
 同 季 覽  
 同 蘭 少  
 同 汀 芦  
 同 里 白  
 同 莊 草  
 和州郡山 利 方  
 同 不 哲  
 サヌキ観音寺町 鐵 砂  
 同 目 下  
 同 教 繁  
 同 鐵 友

今は名の富貴はかりの牡丹かな  
 心なう咲にはあらしふかみ草  
 おくふかきほたんの花のつほみ哉  
 獅の繪のかけ物かけて牡丹かな  
 日の脚へ蠅の飛込ほたんかな  
 なかに又腰をかゝめぬほたん哉  
 牡丹見る姿や今の角頭巾  
 桐油こしや牡丹の紅の半開  
 争や牡丹の花の名の位  
 しら砂は牡丹の花の餘りつや  
 灯をたてゝ牡丹見て去ぬ男かな  
 牡丹見やはす切鼻は後から

同少年 傳太丸  
 同少年 松 水  
 同 保 舟  
 同 北 外  
 同 雨 石  
 播州安粟 里 水  
 同 平穂 溪 士  
 同 煉 風  
 同 亂 雅  
 同 安粟 固 頰  
 同加古川 友 松  
 イヨ松山 羨 鳥

鍋尻のやけぬ間かない牡丹かな

同中ノ庄 三調

へつらはぬ風や牡丹にやりはなし

周防柳井 鴈川

大輪の椿の後はほたんかな

同山口 半男

細聲になるや盛のほたん畑

豊後府内 通樽

ふるいちの軒やほたんの盛り前

同松 風

東雲や牡丹をちよつと嘗て見る

熊野田 龍新

棟上ケや槌の音よはる白牡丹

同吟 研

まな板や牡丹畑の奥さしき

攝トクラ 柏溪

日の出や帯を引づる牡丹畑

同排 溪

盃や持手こゝらす冬ほたん

法界寺 蘭溪

路次の戸や鳴に氣のはる牡丹はた

守部村 瀧口

姫様と牡丹抱へる座頭かな

石蓮寺 川風

かくれ家もや、いかめしや冬ほたん

今在家 旭芳

宵柏の玄妙人情にあらず

伊駒 巨海

天仙の地にまくはるやふかみ草

櫻塚 柳郭

日盛りや御乳の出揃ふ冬牡丹

今津村 女

跡をこふ心やこれかはつほたん

新 稻 一慶

あいさつにわらひかゝるや冬ほたん

河内飛田 一匡

雨の日は花をたゝみし牡丹かな

丹州柏原 甘志

清貧も草に耻けり白ほたん

備前下津井 盤孤

末の世に猶さかんなるほたんかな

長崎 李七

ほつかりと牡丹やひらく星月夜

鴻池 百三

牡丹花は摘草好きか樵り連

有馬 嘯水

仲人のせはしき秋よふかみ草

アキ廣島 井水

大名の様躰したるほたんかな  
 牛の脊や牡丹植たるむかし人  
 牡丹植てむかしや慕ふ妹か歌  
 賤さのはなれたうそな牡丹替  
 雪傘に笑ふやうなり紅牡丹  
 つねの草のそはにもよらぬ牡丹哉  
 月程はしたにもしるき牡丹かな  
 牡丹見や胡蝶にまけて一やすみ  
 日に向てうきたつ雲やふかみ草  
 むかふ程面まはゆし白ほたん  
 牡丹見の戻りに花はなかりけり  
 遠ゆかり牡丹次手の御慶かな

伊丹邊 成松子  
 柏崎 郁翁  
 攝島村 生水  
 東山田 吟鶯  
 カヤノ 蘭風  
 攝東山 梅照  
 池田里 諷  
 同 藤貫  
 同 以水  
 同 玉水  
 同 寸道  
 同 汲外

蚊雀のついにひらかすほたん哉  
 ふりつもる雪にも眠る牡丹かな  
 蝶も羽をくらへて見るや白ほたん  
 追込んて猫にひざ折るほたん哉  
 見廻して十徳干や牡丹畑  
 葭垣を首のへり越す牡丹哉  
 のんこりこ花しつか也ふか見草  
 散るほたん風をかまはぬ姿かな  
 ゆたかさにはれて寝たるか牡丹主  
 牡丹咲こなりにば又何人そ  
 ほたん見や房へ枕こ水の禮  
 牡丹提てどこへこ問は、ほたん見に

同 可棟  
 同 一葉  
 同 未定  
 同 久保  
 同 柳水  
 同 千丸  
 同 末右  
 同 百千  
 同 朝道  
 伊勢團 友  
 櫻塚西 吟  
 大阪由 平

先白きほとんに花の夜は明ぬ

海 棠

夏は柱に虫の香囊

好 春

争へる酒に冠の纓折れて

言 水

手がごどかねはいこゝかゆけれ

海 棠

次の間へ使をかけるけふの月

好 春

金魚はねてはみだす朝霞

言 水

わか戀はつゝむこそすれこ芭蕉にて

海 棠

宵く門に足を錦木

好 春

世に賊の名をこる事の口惜さ

言 水

今一度こそ主をかくまふ

海 棠

かゝたずも金剛垣にきく鳥

好 春

草摘かへる京の出はつれ

言 水

嶋原を花有かたへ引たかる

好 春

春のうれしい頃そ仁なる

海 棠

素海松茶を追ゆる雨か東風交り

言 水

渡し場からは泥に板橋

好 春

盆前の瓜や茄子に夕月夜

海 棠

のほれは愛宕嵯峨は薄霧

言 水

家くゝをさそふていぬる燕

好 春



つれの借ッたる馬へ風呂敷

辨慶か真似して見する杖こりて

塵むすんでも父のよろこび

鬢までに古風の残る奈良の里

梢なからに柿を賣るころ

あふのいた佛を立て秋の暮

いふ事なれこ細い鹿の音

月入て後を雑喉寝の初め也

娘一雨く〜てよき

かうぬけりや四條へちかい誓願寺

どの藪からのほこ〜きす聞く

膳過て袴ぬがうこにらみ合

海言好海言好海言好海言好  
棠水春棠水春棠水春棠水春

海ほこ景な物は侍らぬ

入相は命をぬすむ花に風

藤に野郎の羽織紋なき

食時はつほねもかすむ柴屋町

まねきかへして又鏡こき

海言好海言好海言好海言好  
棠水春棠水春棠水春棠水春

夢名殘俳諧集卷二

花句

寄花懷舊

道筋のかたまる花のさゝ意哉

手つから編た蕨狗脊

尺八に雉山鳥の踊り來て

顔見るやうな便きく也

はしり出の梅挾まれて又飲める

川へはちく／＼番匠の音

朝の月笠にしらげて下り坂

芋吹かへす猪の息

樫シラカバの紅葉見よふこ契る也

海 棠 東 行 万 海 何 中 雪 鳩 隅 竹 岸 紫 執 筆 東 行

薰ユガすあふぎを細殿におく

ぬか星に渡りおほせて神の川

瓜ぬす人に竹の弓ひく

又主をころふこ思ふ氣てはない

山の大師の指も十本

待兼てのめは煙草の各別さ

わしがわるいか餘所の耳借ワ

名をばつこ流す柁の一重垣

木綿くらふた牛をばい出す

月雪にはまる心の身を拜む

酒連に成てのぞくまな板

あをによし奈良は古風て香ばしい

海 棠 何 中 万 海 東 行 雪 鳩 隅 竹 岸 紫 何 中 岸 紫

お乗物から謎の腰おし

人前は痞と腹を紛らかす

粽まくのを見たが初戀

太秦の連歌ぶち消す時鳥

頼政以後の名將の沙汰

□程の先て醬油を譽る也

よい氣な駕籠しや若江迄やれ

紙出して手本くこつきつける

箱の晶ても山茶花の咲

いこゝさへ淋しい雨を伏見脇

いやの持ふの後妻せんさく

うはかわへ情のうかぬ髭大臣

隅 何 万 東 海 隅 雪 万 岸 海 隅 雪 隅 海 岸 万 雪 隅 海 東 万 何 隅  
竹 中 海 行 棠 竹 鳩 海 紫 紫 海 鳩 竹 棠 行 海 中 竹

社普請の木に鳥の糞

温泉口迄丈夫な肩に取つきて

月は十五夜京の饅頭

拙僧か述るところは秋の風

鎧の露をはらふ若者

白むかし北野茄子て最一ふく

夜はふくろうの聲にしつまる

蛇籠より上を流るゝ濁レ水

羽織を着たはぬるい鎧持

薫の外へもちつて花の春

古詩やはらかに謠ふ鶯

何 岸 東 万 隅 東 岸 何  
中 紫 行 海 竹 行 紫 中 鳩

お茶湯のたきさしや此山の花

なんの海邊雁鳴て咲菊の淵

綿の花たましく蘭に似たるかな

蘭の香や物の位の急ならず

染つくす百日紅や後の月

朝霜の花も奥あり茶木原

立かゝる清水や岩に百合の花

酒桶にはしこをかけて窓の梅

鳶の輪につれてよらはや山櫻

夕月におもしろ過る梅の花

米あらぬ折喰物か松の花

小袖着た鳥のあそひや花の中

任口

似船

江戸素堂

同立志

大阪諷竹

京去來

支考

ミノ木因

大津丈草

京風國

木曾塚惟然

京吾仲

往古より花に呵欠はなかりけり

つぶくさ梅の眼や花すこし

棚橋はいつ反古にして花若葉

雨あつて懸乞來たり遅さくら

出替りを頭巾て行や花の比

花の井の浮よの顔も散にけり

落人や野邊の夕顔咲揃ひ

夕顔や窓の草鞋に咲かゝり

春に擣き篩シにかけて梨の花

捨涼や鬢にかゝりし草の花

菅笠に手先さへきる花野哉

聲なくて花や梢の高わらひ

大阪岸紫

同舍羅

江戸艶士

同山夕

大阪その女

櫻塚西吟

京一奥

京梨叟

江戸百里

京和海

大阪三惟

京立圃

誰か初手をほめならばすや花栲  
 夜の花鴨のむなぞり奏しけり  
 格式の通りに花のくもりかな  
 初花や片しの筆は墨つかず  
 七草や梅の雫の落どころ  
 山吹や箔座をもれて重寶な  
 花に寝てさむさの外のあらし哉  
 柳にもかゝりかましや花あつめ  
 また春かない物ならば花の枝  
 作り木の中にはうけし糸櫻  
 竹の戸に紙子しまはん花の比  
 灌佛や花をしまへは寺ひいき

大 阪 幸 方  
 伊 丹 人 角  
 イ セ 團 友  
 伊 丹 濁 水  
 イ ヨ 羨 鳥  
 大 阪 愛 貞  
 池 田 藤 貫  
 江 戸 專 吟  
 池 田 里 諷  
 カ ヤ ノ 蘭 風  
 山 田 吟 鶯  
 ア キ 廣 島 柳 江

ぼつとする空を櫻の咲時分  
 天窓から肩から袖の花を散る  
 われのみか梅にこそしの匂ひあり  
 古寺の花もくらむや春の雨  
 松しまのはなしふるびつ初さくら  
 おもふその倂さはくさくらかな  
 手を合すはかりに咲や池の蓮  
 燕のくゝりありくや藤の棚  
 咲花にうしろ向たる二王かな  
 机からちつていんたり山さくら  
 いくつにてそなたは若い桃の花  
 澤山に見ればこそなれ菜種花

大 阪 孟 弓  
 同 我 亮  
 同 芙 雀  
 池 田 以 水  
 丹 柏 原 志 集  
 京 猿 尾  
 イ セ 水 甫  
 同 里 白  
 池 田 邑 水  
 大 阪 榛 國  
 ヒ ロ シ マ 井 水  
 大 阪 笑 種

瘦藪やくゝる覆盆子の咲おくれ  
 蓮の香に聳寝を覺すうつゝ哉  
 薬にもなる匂ひかな梅の花  
 梢よりうへ見ぬ藤の盛りかな  
 薄鬢か大鞍そふなよ花さかり  
 花くゞこ下戸の歩行は濱焼か  
 野守らか何膾きる蓼のはな  
 つゝまれて行間にひらけ水仙花  
 すけ笠のほつるゝ迄や陸奥の萩  
 むねのすく色や寝起の花あやめ  
 鶏頭を提ていつるや花軍  
 しら梅や風吹あるゝ川の浪

京 里 右  
 大 阪 芦 角  
 イ セ 反 朱  
 同 莊 草  
 伊丹邊 成松子  
 鴻 池 百 三  
 和歌山 晚 汀  
 池 田 玉 水  
 イ ヨ 寸 松  
 イ セ 季 覽  
 同 蘭 少  
 サヌキ 保 舟

合羽干す空になれかし花あふひ  
 花葵ならひてひくし石佛  
 こちらから咲たもしれす垣の菊  
 夕顔の花てるや湖の濱座敷  
 瓔珞の顔にかゝるや藤の花  
 山吹に水をうちぬる礫かな  
 寝た馬士の顔色さるやすみれ草  
 水かさます蛇籠につよし澤桔梗  
 空染や中は眞白な花の瀧  
 山茶花や星のきらつく手水鉢  
 食傷して花に四月にしなれけん  
 歸るさやぬり笠着せし杜若

同 芦 舟  
 サツマ 忍 求  
 イ セ 乙 由  
 江州舟木 重 定  
 イ セ 汀 蘆  
 ナ ラ 幾 吟  
 江 戸 一 塊  
 京 三 甫  
 クマノダ 龍 軒  
 同 吟 鉢  
 今津村 女  
 大 阪 琴 子

澤桔梗流るゝ花や雜喉の味

京 正 木

余の花をこふて何せう茶チヤコヘ

イセ 柴 友

おこなしの雨夜姿や梨のはな

大 阪 扇 芳

山さこや槽焼つきて花の時

嶋 生 水

菜の花や日のふりかゝる八ツ晴

三 宅 吟 東

菜畑やあゆみつくして梅の花

長 崎 李 七

折ゆくな花に恩ある雨やこり

京 萬 里

念いれて髪結ふまいそ花の雨

同 其 桂

たんさくや花見くゝのおき土産

池 田 久 保

隣にも食の吹たつさくらかな

イユ中ノ庄閑 鷗

片枝や引は浪たつ藤のはな

秋 田 可 笑

此流れすみさへすれば花の川

大 阪 李 投

いとし子が夏旅おもへ草のはな

京 助 水

朝顔を見ぬふりしけり母のふみ

同 嶺 昌

朝垢離に氣をさらけり澤桔梗

同 湖 水

花の香や手拭にさへ吉野川

豊後府内 松 風

初花の一番鎧やお引馬

同 通 樽

花筐驚破や遊女のちから足

小曾根 氏 丸

ちる花を惜むもけふの裕かな

有 馬 嘯 水

田舎こも見へぬは菊の白さかな

京 紅 残

小憎てや左扇て花のぬし

大 阪 鷺 岸

家内を三日にわけて花見かな

石蓮寺 森 風

花水の桶にもそふる鳴輪かな

京 幾 貞

夜あらしに足見よこちの花むしろ

大 阪 紫 英

相宿の鳥の寢覺か花曇り

嚏に散て悔しき芥子の花

ちる花か呼かもしらす足袋の紐

鶏頭のいくびも花の姿かな

萩ちるや木綿車の窓明白

春の野や蓮華菜に氈の一思案

毛氈に色さられけり花さかり

瀧本の一順はやし二月花

冷食に誰か味つけし花の下

かくされて花見ぬ寺の野郎哉

辛皮や花咲木ならむこかるふ

朝良の花を見たさの丸寢哉

周防柳井 鴈 川

京 戸 遊

大 阪 百 合

江 戸 一 排

京 一 奥

同 正 倫

同 鼠 卜

江 戸 渭 北

京 古 柳

同 古 帆

大 阪 龜 女

茶の花の自慢かほなる枯野哉

水仙に雪に花咲氣根かな

水仙の花の鳴音が一重切

人顔のへりて涼しや蓮の花

くつろいて御代に起臥花の下

咲花や一重か結句にみふり能

初花や何たらぬこもおもはれす

はつ花や氣のせく門に馬笑ふ

夕顔の白いかいなき蚊遣かな

桃さかり狐のはへる楠のうろ

花に行夜から娘か笠の紐

花見にはよつ程白し後家の顔

京 常 元

和州郡山 柳 川

京 應 水

同 一 之

播 州 溪 士

同 亂 推

豊後府内 風 角

同 路 柳

京 和 草

京 湫 水

櫻 塚 柳 郭

加古川 友 松



大名はおれ等か山の花見かな  
 舟待や蘭に世話やく蜘蛛の糸  
 間鍋の尻もすはらぬ花見哉  
 みよー野や花もくたけて人なれて  
 卯の花のしろみや袖か鎌はつれ  
 おくゆかし道のつきたる花すゝき  
 つやくゝ星も照なり枇杷の花  
 唐桐の花や晝寝の枕もこ  
 囉ふくや馬に荷にさす花の枝  
 花しきみ鴉くはへし朝日かな  
 卯の花やこもししらくる椽柱  
 白無垢に影の小紋や梅の月

同 瓢 水  
 京 嶺 南  
 久 世 楓 下  
 同 市 弓  
 サヌキ丸能破 笠  
 同 北 水  
 同 雨 石  
 播 州 里 水  
 同 煉 風  
 和 州 利 方  
 同 不 哲  
 伊賀名張 吹 琴

芍薬や娘見に来る碁盤嶋  
 その中に甘き露あり玉椿  
 笑聲女かちなり花の幕  
 あそふ日や堇につなく岩つゝし  
 そつこふくあらしや花の小晦日  
 茶の花や蜘蛛の古巢のつゝみ咲  
 十はかり鳴子も花に花見かな  
 土橋や蘇木の花の夕曇り  
 藁屋ねにすらりゝ桃の花  
 花の日は猫預るや庵の留主  
 暮かたの鐘うそすこや花の寺  
 山吹の花色里の薫りかな

新 稻 一 慶  
 イヨ中ノ庄三 調  
 大 阪 風 麻 呂  
 同 悠 川  
 池 田 汲 外  
 同 寸 道  
 アキノヒロシマ 柳 枝  
 富 田 桃 溪  
 アノウ 雪 溪  
 法界寺 蘭 溪  
 トクヲ 柏 溪  
 トンタ 閑 三

あこ先になるやくちおし梅櫻  
 きれ物をこつゝおいつの歸り花  
 盡せしな筆の握つて花の事  
 盃の雫や花の池田川  
 賣物と見へぬ社なれ山さくら  
 須磨の浦欲か出来たり白蓮花  
 菜の花にこたへて嬉し箴の音  
 枝なからちるや風の糸さくら  
 さえつれる鳥うちこして櫻かな  
 ちる花やまた雑水にしても見す  
 うきつこめ花に耻かし花見かな  
 氣をやます程のそん也花に風

京 易 吹  
 池 田 朝 道  
 江 戸 止 水  
 大 阪 東 里  
 同 海 音  
 江 戸 尺 草  
 同 琴 風  
 池 田 百 千  
 大 阪 矩 久  
 伊 丹 春 堂  
 アキ宮シマ 小 泉  
 同 のむら

物の葉をそつこのけてや歸り花  
 やこふたうせましき花の戻り哉  
 花曇月も匂ふや卷そへに  
 無風雅の子はいかめしき花見哉  
 灰へやは崩れてのけて爪の花  
 花片々鼓をなめる舌の先  
 はや花に女夫物くふ後堂  
 木ひこつに花と櫻の咲にけり

大 阪 沖 風  
 同 柳 波  
 同 潮 白  
 京 白梅園 鷺 水  
 大 阪 東 行  
 江 戸 嵐 雪  
 京 言 水  
 大 阪 來 山

さすられて寝入こゝろや花に蝶

長閑にそふは家内留主也

かき餅やあられの役を請りて

はてわすれまい状をわすれた

朝の月しきりに旅のおもしろき

ほんのくゞさ松のうす霧

縁前のむすめ子共は萩すゝき

わけもない名の立し山伏

海棠

柳波

冲風

藤貫

朝道

里諷

扇芳

棠

西風にそこね玉ひし御屋しろ

ほこゝきすついくゞさ鳴行

飯鮓のさんしよにむせて涙くむ

屋いこのあこのいまたほかく

八朔に延引したる禮かへし

うつ、細ならこちも同心

秋風や義理一返の念佛講

こよひの月は四つ過から

一の洲へ諸國の船は出揃ふ

つまる所か此碁切まけ

手の筋を見よふこいへは顔をふる

あくるこそそちも最早十六

波

風

貫

道

諷

芳

棠

波

風

貫

道

諷

あらけれと先鞍味はよい馬しや

のぼり甲に町はさゝめく

病人か病人訪ふて大笑ひ

いつも替らぬ嶋の胴服

櫻ちる陰にかはらくのり細工

ちよつびくこすゝめ囀る

ありそふな寄居虫の居らぬ川のすそ

餅にも胸のやけぬつは者

寒空に月かこつけて待はさて

此水仙こそよかさし櫛

錢銀の無心云ふ氣はつんこない

いの字もしらて高い法問

貫 風 波 棠 芳 諷 道 貫 風 波 棠 芳

瀧の水すくに風呂屋へ流しかけ

四月に花のいまたちらほら

腹筋をようする状をおこされた

亭も座敷も掃除しておけ

筆 芳 諷 道

ちらすなよ花に大工の手斧打

柳の枝をおろす軒口

雁かへる空は中くしつかにて

こなたかしらすけふも御通り

てつきりよ晩の月見は酒てある

重疊の直に拂ふ新線

露霜をはや踏ならふ十五六

何所やらまたき鄙ノの髭連

藝能も此暑さてはならぬ也

百合なげ入て扱も不出來さ

若衆に發句望てたまらする

あかりへすかす龜甲の櫛

海 棠

灌 佛

愛 貞

盃 弓

柳 枝

繪 雪

佛

棠

弓

貞

雪

波

片足は雪踏なからにふらさけて

いつ來て見てもにきやかな宮

笥から石へ流るゝ水の音

茶のしたもやす窓の有明

埒もなう稻こく比のやかましき

うさんな空の晴るゝ秋風

棠

佛

貞

弓

波

雪

夢名殘俳諧集卷三

香句

香焼てわれも更行月夜哉

濱の二階へ初汐の嶠たかね

穂のうへをはなしくくに馬やりて

拙つとをさけたる指も瑠理紺

かたつける膳はたれ待心あて

雪はちらく竹に鶏

鼻つまむ闇と申は戀路にて

例の所に又しゆんで居る

舟見ても胸につかゆる浪の奥

書ならへたれや是も歌書めく

海棠

その女

東行

棠

女

行

棠

女

行

棠

推量の蓋もひらけて花の雲

いたこりの酢にけふの目覺し

女行

香箸のゆひにこたゆる霜夜哉

箱どち生けた床の水仙

同音に謠のふしをうけこりて

降うはしやらいかふけふたい

あらましに相談しまる宵の月

穂て見たよりは庭の世中

海棠

朝道

里諷

李七

井水

藤貫

昔狩に是非一日は行合点

つい念比の出来る湯の山

なげふしをなげちらさるゝ大なまり

はたりくゝ浪の川ふね

ゆく先を手帳につけて花盛

春もおもへはこも廣く

一 慶

諷

道

水

貫

慶

橘やむかしの人の袖香爐

木犀の晝はさめたる香爐かな

誰か果を蘭に培香匙火筋

香箸に菊の虫こる縁てこそ

蟬の羽のかるきうつりや竹のなみ

香の氣を一花<sup>ヒトハナ</sup>もてり汗のこひ

白菊や鐵のふすまも振に溜

夕涼伽羅て釣たる若衆かな

季 此

江 戸 嵐 雪

櫻 塚 西 吟

大 阪 來 山

同 所 の 女

同 一 禮

京 團 水

大 阪 東 行

香箱の時代や雪のひかし山

一炷の香のもうけや秋の寂

一焼の伽羅か踊に行わたる哉

伽羅の香もこもにかたる、砧哉

香幕や涼のもこの青海波

中河と鯉や涼しき夕まくれ

生膾箸て焼から捨る汐干哉

伽羅と見る天窗も持ぬ夜や寒み

いの字こは素顔見せけり夕す、み

芳しい菊にもなる、貝の甲

かけるふのかろく浮ふや水の上

蚊遣火に名の木つかはや吉野栢

イセ團友

大 阪 舍 羅

伊 丹 百 丸

大 阪 柳 波

江 戸 東 潮

同 止 水

大 阪 潮 白

同 海 音

江 戸 琴 風

大 阪 文 十

江 戸 艶 士

伊 丹 濁 水

鶯に寝覺て寒し旅香爐

草の香はむかしの空の匂ひ哉

名香のはなしも久し御身拭

水草に螢を掬むにほひかな

しめやか也みそれ降る夜の伽羅くらへ

聞たかる人こまらせて千鳥かな

太郎坊も伽羅の沙汰あれ年忘レ

白梅や千里流木錫の筥

焼からや團にのせてほる禿

芝蘭人のために不香と申に

香焼て人のためする東風の風

伽羅の香やになは、拐ほこ、きす

池 田 朝 道

三 宅 吟 東

大 阪 灌 佛

伊 丹 春 堂

嶋 生 水

大 阪 榛 國

江 戸 專 吟

伊 丹 人 角

池 田 邑 水

大 阪 雲 貞

同 笑 雅



顔かくす簾や伽羅に杜若  
 簾もる伽羅や櫻の顔かばふ  
 草の戸に伽羅割音や冬かまへ  
 夕風やふせごに薫る丸はたか  
 暑き日や碁盤の下の木のすかり  
 月雪に火熨の中の匂ひかな  
 虫出しや伽羅たき捨し比丘尼御所  
 勅方にいこもかしこし梅の花  
 焼からやあしたの蚊屋に猫の聲  
 伽羅の香やくちぬむかしの花いかに  
 道くも火繩に伽羅や朧月  
 香箸の角振り出すや蝸牛

新 稻 一 慶  
 東 山 梅 照  
 山 田 吟 鶯  
 池 田 藤 貫  
 大 阪 我 亮  
 同 東 里  
 池 田 玉 水  
 江 戸 山 夕  
 伊 丹 邊 成 松 子  
 攝 東 山 扇 風  
 イ セ 莊 草  
 同 季 覽

猫の子に伽羅の香もあり置火燧  
 竹の子のひこよをふるや蟹狐  
 秋の夜を伽羅の枕や五十年  
 來ぬ暮は名もない伽羅の蚊遣哉  
 蘭殿の御成御門よ鼻はしら  
 あかつきや伽羅のすかりを鳴千鳥  
 一けつり根かけの伽羅や更衣  
 ほこゝきす耳て聞こより鼻てきけ  
 指て押すすかつた香の霜夜哉  
 夜につれて伽羅の香ふかし魂祭  
 たちはなの匂ひもこめて香合  
 香焼は鳩ものそくや軒の葛

長 崎 李 七  
 江 戸 渭 北  
 イ セ 汀 芦  
 大 阪 風 麻 呂  
 小 曾 根 氏 丸  
 イ セ 蘭 少  
 同 水 甫  
 鴻 池 百 三  
 京 里 石  
 池 田 寸 道  
 大 阪 保 直  
 イ セ 里 白

つまこかし朝貞にほふ扇かな  
 伽羅の香にうなしさくるや雪の竹  
 引延す伽羅よ裕の裾まはり  
 ふくさよりなた出す伽羅の蚊遣哉  
 香焼てむかふ霞や鶴の聲  
 なつかしやさすか紙布の袖香爐  
 火入には伽羅の香のこる青簾  
 一焼を火繩にはさむ山さくら  
 焼さしや井戸替くれる楠の楳  
 ほこきすけちらかしたる香爐かな  
 袂から香爐を出せば小夜千鳥  
 伽羅の香やちかのしほかま袖かうろ

京 蘭 松  
 池 田 汲 外  
 京 可 猿  
 イ セ 反 米  
 池 田 百 千  
 イ セ 乙 由  
 京 和 草  
 小 田 原 提 泉  
 ク マ ノ マ 龍 軒  
 新 稻 柳 谷  
 イ セ 柴 友  
 能 登 湛 水

思はずも香きく庵のしくれかな  
 いさ待間初音をついてほこきす  
 香箸て虫もはさむや夏さしき  
 伽羅たかん花に出茶屋の綿實から  
 薰木や朝虹立し夏の月  
 伽羅の香のにけて名ばかり蚊帳の中  
 さやらの香やねさめに匂ふ蚊屋の内  
 さみたれや圓居に眠る香の札  
 汗くさき袖をはらひし蘭麝かな  
 雪の夜や閑に香を焼て居る  
 かはりけり香の匂ひに夏ころも  
 名香に詩人の鼻や軒の梅

播 州 里 水  
 同 丸 蝶  
 池 田 一 葉  
 同 共 丸  
 和 州 柳 水  
 同 不 哲  
 加 古 川 友 松  
 大 阪 李 投  
 同 悠 川  
 播 州 溪 士  
 同 亂 推  
 和 州 利 方

名香に鼻のもけ行御修法也

巻炭の匂ひ透間をのそくかな

名香や行人戻す青すたれ

春の氣や來臨香に東むき

はつあらし伽羅の香賦る都かな

伽羅の香や鳩の霜はく堂の椽

木犀や花に似合ぬ朝匂ひ

何所迄か香の行つく夕しくれ

鶯に伽羅たきしめて朝けしき

一炷の沈む曇りの暑さかな

花生て雪待床のにほひかな

目か行は鼻へ香の來る涼舟

大 阪 鷺 岸

江 戸 林 爪

櫻 塚 柳 郭

トクヲ 拍 溪

法界寺 蘭 溪

トシメ 桃 溪

今在家 旭 芳

守 部 邑 齋

大 阪 扇 芳

江 戸 百 里

大 阪 芙 雀

カヤノ 蘭 風

きやらたいて鳩になる、や秋の暮

たきもの、障子くゝるやかほよ鳥

空焼は秀匂めくなりほこゝきす

鶯のたきものほるや藪の内

翠簾に來て薰物くさき螢かな

薰の外の儲や八重さくら

面花子あり點梅粧あり和漢皆世のよろしきに隨ふ

五步櫛や梅が香ささむ賈嶋佛

餅でこる曲輪の埃や花の風

薰の匂ふ戸ぼそや朝の雪

また死ぬ氣に伽羅さかす時雨哉

池 田 里 諷

大 阪 三 惟

同 沖 風

同 幸 方

越 中 浪 化

大 阪 岸 紫

京白梅園 鷺 水

江 戸 立 志

大 阪 諷 竹

京 言 水

寄 香 懷 舊

鹿鳴ておもへはゆかし香の銘

竹に流るゝ水の有明

唐からしぬき菜の汁の時を得て

旅はそれこそこゝろやすけれ

おれとてもあたまの兀たばかり也

川は床机の今を最中

宵闇に星ふたつみつ晴かゝり

しれた音する百姓の家

浪人をすれやふるけれと醫者をして

冬至か來たら餅もよかるふ

折れそふな枝に小竹を添る也

海 棠

支 考

吾 仲

子 直

范 孚

棠

考

仲

直

孚

棠

物いふ聲の藏の窓から

ほれられた時にやどうして居ようやら

蚊屋しまふ夜は戀もむさし野

月影に見れば大事な庭かゝり

さうのかうのこ老の漸さむ

ひや汁に煮しめは花のお定期

此日和にこ鳥も囀る

畑打にけなりからすか伊勢参り

江戸のむすこを酔にも味噌にも

長持の中はしらねこひつかひか

暖簾の陰にすこしからくり

もつはらこ角前髪のにきび時

考

仲

直

孚

棠

考

仲

直

孚

棠

考

仲

蕎麥の粉二升是てやたるまい

しくれうとすりや日のさして時雨兼

沖の鷗に綱の浮桶

一文かけしきを見たる遠眼鏡

あんな顔ても点者して喰ふ

名月の秀句に妹かかきねこは

聞ふるひたる萩のうは風

船頭の際には鮓を釣りはせて

おしい節句の日はくるゝ也

わか腹をさすつて見たる椽の先

急な使の二度も三度も

寄こころさばる所の花さかり

直 孚 棠 考 仲 直 孚 棠 考 仲 直 孚

津みたき物のおほき若草

筆

夢名殘俳諧集卷四

酒句

寄酒懷舊

そめ玉の盃に底やあられ酒

寒椿こも見えぬ色かな

出よくこ思へは人の來かゝりて

鴉はいつもかあゝゝゝゝ

有程のものは食喰ふ道具也

れられた松に釣瓶結つけ

更ぬやう月は峠のこちらべら

草履と袴かふる秋かせ

小判迄なげや鶉のくわゝかしり

海棠

立吟

鬼貫

之白

鋤立

里右

泥足

轍士

執筆

宿老の伽に迷惑な餅

雪隠へはいると文を引ツこいて

あたまかくのもあたし拍子か

隙なこは云へとも用かひよつこまた

己か罷るはしらぬ穴堀り

羽織より結句繻半かはれをする

角あるかたにこまる大岩

梢行木曾の虹のむら時雨

月見た時の親かふところ

ものおもふ旬に實の入秋の暮

しのへくこ草もしのふか

花も香も奈良をひかるゝ跡のさま

海 立 鬼 之 鋤 里 泥 轍 氷 海 之 鋤  
棠 吟 貫 白 立 右 足 士 花 棠 白 立

はつ雷のてんほなりけり

畝ぬりの道かすへつて通られぬ

鳥羽繪を染た是は手拭

夕風に藪もうなづく椽の端

お子のお屁に乳母か耻あり

角田川心するくくなまけ行

此齒も是も最う動き出で

捨やつても三線なしに素て所望

壁へあたたつて落る涼風

宵寝するくせに朝寝も一番に

役者と云へこ馬になるのみ

鼻紙の角を揚枝にうつむきて

立 鬼 里 泥 轍 氷 鬼 立 海 之 鋤 里  
吟 貫 右 足 士 花 貫 吟 棠 白 立 右

又今日もこかれこちける  
 待月に引やぶつたる枕ぬう  
 この比ははや冷ものまれぬ  
 美しい鳥の羽かひに霧しみて  
 菜刀の刃をつける摺鉢  
 錢銀に中か悪ふて柴の庵  
 風ひいたにも疝氣にも灸  
 さし廻す船に聲ある濱の橋  
 あの座敷から花を見よなう  
 内股に油を塗て春ふかみ  
 雲雀にかゝる晝の三ヶ月

泥 轍 之 泥 里 鋤 海 立 氷 鬼  
 足 士 白 足 右 士 棠 吟 花 貫

酒をたゝへ色うつくしき菊池かな

貞室

酒くさき鞍うつなり後の月

江戸其角

藤八けんむかしの人の酒陶

京晩山

世にもてなさるゝはやり哥もおかしく聞えて

行こしや樽の南の字になむあみた

江戸嵐雪

人はいさ醒れはくるふ花の下

京團水

屠蘇に酔初つゝ既に今日の菊

大阪諷竹

置酒に酔て蜻蛉もゆる也

京雲靴



風も名のついで吹より新酒哉

下戸衆に勝所あり秋のくれ

しろくこ見れば餘所の天井也

みしか夜や馬は寝賃を出した事

曲水に盃かふる顔もあり

蝶くは水の下戸なり杜若

朝酒に息もこめけり菊造

酒樽はあきて櫻はくれにけり

名月や酔せて寝せて松の風

浦千鳥かかはや爰にふらすこに

此雪に茶をたつる人は下戸そうな

猿に似よくこて夏至の酔

大阪その女

同 岸 紫

同 來 山

イセ 團 友

江戸 東 潮

出羽尾花澤清 風

大阪 沖 風

伊丹 鷺 助

大阪 八 虹

伊丹 百 丸

大阪 東 里

麻畑や鍬の下行いつみ川

名月の詩歌にかえむ醪ユキヤク

鉢の木や徳利を見れば雪毎に

御忌よりそ持佛の下の二升樽

影法師も色に出けり圍爐裏酒

のむ時はぬくや徳利の花盛

初雪やこふて唐には吞手こも

末我を覺る酔や秋の暮

明日酒になるや吳服の糍うり

間鍋へ一葉入たる茶摘かな

酔て去れ河風寒し番匠童

灌佛や寺を隣にあけ酒屋

江戸 尺 草

伊丹 濁 水

江戸 百 里

同 專 吟

池田 藤 貫

同 里 諷

大阪 芙 雀

伊丹 人 角

京 里 右

嶋 生 水

ヒロシマ 井 水

餅くへこ訪ふ人まれに菊の有  
 ふらすこのこり置れけり秋の風  
 世を旅に夜着も枕も樽ひこつ  
 片顔の酔こつて行しくれ哉  
 ほやくこ杉の匂ひも新酒哉  
 酒かふて軒かる旅のしくれかな  
 五升樽椽へこかして雪見かな  
 暑き日もいつそ酒にてこたへよい  
 良法し下戸てあつたか秋の暮  
 さむかるや下戸を時雨の染兼て  
 雪の朝顔に艶出す寝酒哉  
 吹度に酒呼梅の匂ひかな

大 阪 我 亮  
 大 阪 榛 國  
 池 田 朝 道  
 新 稻 一 慶  
 伊 丹 邊 成 松 子  
 大 阪 柳 波  
 同 三 惟  
 カ ヤ ノ 蘭 風  
 鴻 池 百 三  
 大 阪 扇 芳  
 池 田 玉 水  
 京 武 則

酒のめは鼻にこりつく小蝶かな  
 雪見には酒でなければならぬ也  
 新酒や蟻空で餅を搗  
 友なくて砧うちけり夜半の酒  
 きけやきけ耳こ口こにけふの酒  
 碁をやめていさ酒のまん初時雨  
 行所酒樽は寒し難波口  
 垂桶の酒や鞍の五月雨  
 上戸なら何こあらふそ一夜酒  
 春の野やいつくこまりの搦子酒  
 名月や鼠衣を酒ひたし  
 寝酒ひこつ隣の夜着へさすもあり

ク マ ノ タ 吟 谷  
 加 古 川 友 松  
 石 蓮 寺 乏 風  
 備 中 倉 敷 露 堂  
 池 田 可 棟  
 同 寸 道  
 江 戸 渭 北  
 大 阪 保 直  
 同 大 鶴  
 守 部 瀧 口  
 周 防 鴈 川  
 伊 七 反 朱

酒しほこいふて夏断の今幾日  
 新酒や酔ねてやすの舌もつれ  
 池田酒わきてきひしや秋の風  
 冬枯や幕打木には名染有  
 新酒てそえをかけたたり市の聲  
 竹たつる門は賣なり鯛すゞき  
 昔かりや後の酒には手もつけず  
 泣ふより笑ひ上戸や冬籠  
 川狩や乞食の火て酒のかん  
 新酒に菌も外山も時雨かな  
 疊にも酒をのますや菊の露  
 川かりの游なからや小さかつき

同 汀 芦  
 池 田 汲 外  
 サヌキ 不 断  
 丹 波 澄 風  
 池 田 未 定  
 大 阪 李 投  
 イセ 乙 由  
 同 季 覽  
 櫻 塚 柳 郭  
 和 州 不 哲  
 イセ 水 甫  
 同 莊 草

こてまりや酒の席の車敷  
 持て来た酒を自慢の夕涼  
 折て来た花て酔さん二日酔  
 風呂敷にはたるつゝむや酒機嫌  
 朝酒にまたそえかける落葉哉  
 升なからのむや市中の時鳥  
 今一つ抑てまいれもゝの酒  
 焼塩に味あり花の二日酔  
 うらめしの露に濡つゝ下戸の髭  
 酒買に娘のけしる雪吹かな  
 遠くともまつ松尾の新酒哉  
 目ふさいて吞んで仕舞て酒の雪

丹 波 寸 松  
 イセ 里 白  
 池 田 豊 丸  
 大 阪 鷺 岸  
 同 紫 英  
 京 柳 水  
 同 和 草  
 イセ 蘭 少  
 大 阪 吞 江  
 池 田 柳 水  
 同 久 保  
 新 稻 柳 谷

寝 酩 蚊 半 分

夢下二

青組の部にはかまはし寒の餅

京 醉 雪  
和州戒重 渡 齋

菰樽や付出す雪の女馬士

今在家 旭 芳

新酒や氣うく酔の肘枕

富 田 桃 溪

新酒や木の葉折たく宮所

法界寺 蘭 溪

新酒や轉まんた門へ禮をいふ

トクラ 柏 溪

白くく天目酒の涼かな

アノウ 雪 溪

味噌酒や霜夜わすれて哥枕

クマノタ 龍 軒

早乙女や是から酒か植さする

播 州 里 水

木からしや側てひかゆる醉加減

三 宅 吟 東

ここによき歸花也酒二人

備 中 枳 邑

醉覺やまた朝良は筆の先

大 阪 風 麻 呂

山ほこな柴懷やぬくめ酒

池 田 子 丸

月の出るところを酒の峠かな

大 阪 悠 川

氷る夜や硯の水を酒にせん

播 州 亂 雅

樽こ我れむかふや月の影ほうし

同 溪 士

醉覺は朧の月のおほろかな

山 田 吟 鶯

なまごのを宿へ運ふや簞

小 田 原 提 泉

行水の流れや本の寒作り

イセ 柴 友

はつたりさかんを仕かけて鯨かな

池 田 百 千

四五盃てつい行つくや雪の道

紀 温 吹

水鳥やなれてつほむば江戸戻り

江 戸 琴 風

せめてもの鍋よ自在よ雪の里

大 阪 潮 白

百薬の名主と咄せ秋のくれ

江 戸 山 夕

夢下二三

季略

憎からぬみこりの蟻の玩あそびかな

同 止 水

徳利ある袖は大事に雪吹哉

京 和 海

百日か歸るや花を見捨つゝ

大 阪 文 十

妾に啞のもの云ふ春邊哉

同 海 音

ほしかるものは酒にそありける

七賢はともあれふたり雪の笹

同 舍 羅

三拳サケンもはや金谷のみたれ口チ

江 戸 艶 士

置酒も大かた醒て藤の下

大 阪 東 行

麥酒に京の婿待まつりかな

京 白梅園 鷺 水

青梅や椽からおりて引むしろ

大 阪 一 禮

醉醒や毛むしの落る顔の上

櫻 塚 西 吟

酒のめは猶かんし入千鳥哉

海 棠

爐に毛のはえた鉄ひらの橋

團 水

傘を通せば桶を打あけて

同

云やらぬからは先キハ合點

棠

隅くは眠つて居たる宵の月

同

軍貝こつて虫を吹けす

水

醤油や揚枝のほしき芋島

棠

鍼の手柄に鼻は太郎坊

水

嘘しやゝら見ぬ長崎の長はなし

棠

根つけの蟬に猫の爪研

水

欄干に炭火の顔をためつけて

棠

玄宗の圖も君かうきふし

水

明暮をさる入道さあかし浦

串に松露は江鮭にまされり

秋の風ほうつく前を引まはす

月に對する身はお留守也

見よくこ待たか花であつた花

醉獨活のあまる膳をすへらす

横物は一字もよめす歸る雁

灸の脊中しやきつう打やるな

唐までも末社かくつこたゝみ込

ここてこて來て烏帽子狩衣

黒札にうしろを見する源九郎

細かいのからみなになる菓子

棠 水 棠 水 棠 同 水 棠 水 棠 水 棠

咲花に碇をいれて枕呼

蝗の時へ町を築出す

執 水 筆

夢名殘俳諧集卷五

牛句

寄牛懷舊

秋草の猶くゆかし牛の跡

露霜ふくむ雲の黄昏

天さかる國は眞上に月を見て

最う温飴ても汗はまいらぬ

肥た人の聲は外面へ突通る

海棠

沖風

西吟

百丸

馬櫻

申さぬ事が公事は丸勝

竹馬からすつぼろほんで五十迄

鶴にのつたりやいつくへも樂

しつぱりさつさをぬき出す小性衆

書そこないを口にほうばる

明るやら飛春慶トヒハルハケイの雲かあれ

千鳥チトリの分か物にこまらぬ

朝比奈はかたいち者で豆腐をすく

高座カザからして眠り覺さす

筍をそいてこつたる藪たゝみ

すは陳涉チンセツに勢かさなる

講五位コウイの五更ゴウの比ヒを鳴連ネリて

蘭舟

千及

春堂

億磨

鷺助

座神

鵝群

定安

酒人

沖見

芦笛

忍齋

水口立の大だての月

道の露お手題目を持って出る

狸ごころもに釣た烏柿

初花の山家にはやしいろり咲

店を譲りて連る養父入

春こまの横筋違に子持筋

飛鳥の宮は南都の南手

端に出て絹をたつ日の祝ひ歌

おきあかり小法師おきあかりにけり

姪聳に非時の約束しておいて

難行経たるあたまかゝやく

松明にいけすの鯉の命見る

人角 青人 蟻道 濁水 一慶 蘭風 吟鶯 生水 吟東 龍軒 梅照 西山

たしかあの子は京の生れしや

袖笠をひらりこかさすむらしくれ

今朝は陽向にあふた猫

笛の音におかしい事かおもはるゝ

すてられもせぬ紙くすの文

尼月の月見る窓は月なりな

幾秋住し井の下の龜

渡る雁かはらぬ顔てそれかしも

監板なしの賣買の石

咄せ聞ふ聞に北野のうそはなし

蚊きへおらぬこ夏は極樂

醤油か味噌かはおれもへす合點

邑水 可棟 無心 未定 香柳 以水 止九 柳水 久保 旭柳 一葉 百千



かゝつた舟に碓の音

垣間より狩衣見へる藁屋ふき

あちやらのやうてよつ程の雪

三髭にすこしの智恵をのこさるゝ

深田のかはく堀揚の谷

腹の鳴る物を煮さして秋の月

障子がおれて相撲しつまる

花の座に宗匠ひこりおいて出る

こりわけて扱けふの長閑さ

芦丸

竹水

汲外

寸道

玉水

里諷

藤貫

由平

朝道

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風

牛の子の乳に付きけりさいたつま

牡丹花の舊跡を訪ふ

薄雪に牛の尾ちゝむ山路かな

春雨や降こもしろす牛の目に

涼しさを芦間の蟹を牛の上

野に寝たる牛の黒さをけふの月

牛こもか膝を容れたる夏野哉

大 芭蕉  
阪 一 禮

同 万 海

同 來 山

江 戸 立 志

同 嵐 雪

櫻 塚 西 吟

題牡丹花牛

彼牛やまねけは空に三日の月  
晝顔の這ふて寄りり牛の角

京白梅園 鷺 水  
大 阪 岸 紫

送肖柏翁

草花を笠にかこふや牛に棚

同 東 行

牛の尾や繩になはれて三ヶの月

同 文 十

風に空荷車や鳥羽繩手

同 諷 竹

五月雨や嘶の中へ牛のつら

京 鋤 立

小男鹿や牛角落す鯉節

伊 丹 濁 水

行牛に雪の手からや白牡丹

江 戸 蘭 水

いなつまや世に風流の牛の角

大 阪 舍 羅

柿市の中に眠るや黒ほたん

伊 丹 人 角

から笠を牛にさし行花野哉

柏 崎 郁 翁

鼻息をうしこやちゝむ蝸牛

江 戸 琴 風

落椎や牛て水こる吹はなし

大 阪 潮 白

牛て行四月の山のさくらかな

同 幸 方

春の日と秋の夜牛の一駄かな

カヤノ 蘭 風

骨折りし牛も見に行け稻の花

大 阪 愛 貞

かうしまくあたり嫌ふや牛の綱

同 繪 雪

人も牛も丁と忘れて後の月

江 戸 止 水

夕涼牛にのせたる道場の子

大 阪 荷 葉

餅漕ヒョウマンの口そさかなき黒ほたん

同 海 音

五月雨や姪ごちに牛ひこつ

池 田 邑 水

氣をせかぬ牛やこころさら春の市

同 以 水

田家にあそふ

牛の尾に蚊遣付たり蠅のため

牛て行人のかゆさや花樗

古跡の苔に角ふれ蝸牛

麥の粉に折ふし白し牛の耳

牛の背に小袖かつける時雨かな

こやこれやいつから背戸に秋の牛

牛の背に夢をあつけし花野哉

横牛に花野をゆるする牛の鞭

春の日やつまる所は牛のひま

ぬれ色やしくるゝ牛と釣鐘と

花賣や牛にひかれて御所の庭

おく山や春の夕くれ牛の形

大 阪 八 虹

同 芦 角

大 阪 千 舟

同 東 里

同 三 惟

有 馬 嘯 水

池 田 玉 水

京 万 里

丹 後 紅 茅

江 戸 專 吟

池 田 里 諷

秋 田 可 笑

小 田 原 提 泉

江 戸 渭 北

大 阪 笑 雅

池 田 百 千

大 阪 榛 國

三 宅 吟 東

大 阪 扇 芳

クマノタ 吟 劔

池 田 汲 外

同 可 棟

鴻 池 百 三

大 阪 我 亮

若牛の老を嘯む也今年藁

春雨の茶臼の息や年の妻

牛と往て白川の關やまた霞む

かきもせて牛かいこもか相撲哉

牛の尾のなひくやそれも女郎花

若草を疊のうへやはなれ牛

草枯を鳴やしくれに牛の聲

筋壁や月に角書裸牛

初霜に鼻息よけよ特牛

すり落す柿の枯葉や牛の背

牛飼よわか姉あるか薄陰

牛の子の鼻さしあける尾花哉

牛放す堤は涼し三ケの月

山田吟鶯

花の記や看臺にする牛の鞍

クマノダ龍軒

苗代や峠の松に牛の聲

ヒロシマ井水

三ケ月の箔にひかるや牛の角

イセ柴友水

牛長く松原連る年木かな

嶋生水

散紅葉錦着る氣か牛の顔

大阪沖風

秋草に角はいろはのいの字哉

同芙蓉雀

頬たれて岸行牛の暑さかな

和歌山相奇

牛にのる身は折くのしくれかな

大阪風麻呂

問かけて牛のもの云花野かな

三州舉母舉震

野道行牛の氣をかれ花盛

丹龜山正通

奥の雪しれやまたらに戻り牛

池田末定

あめ牛の尻から起るしくれかな

長崎李七

霜黒し騎尋行はなれ牛

伊丹邊成松子

二つもし牛の角文字大根なら

宇津村女

牧牛のおのか背をくふ落葉哉

大阪保直

冬の野や人を呼聲牛の聲

池田寸道

喰ふ事をしらぬ牛もや庭の秋

同未右

松原や蟬の鳴らむ牛の耳

櫻塚柳郭

ひかりけり牛のあわいに散ほたる

大阪百合

春一日牛こそうれし花の二里

京素流

卯花や入口ふさく牛の尻

サヌキ北水

世を牛ののいて通して幾春か

京一無

こそくつて牛笑せん秋のくれ

同雉鳩